

岩ノ下岩陰遺跡

発掘調査報告書

2008

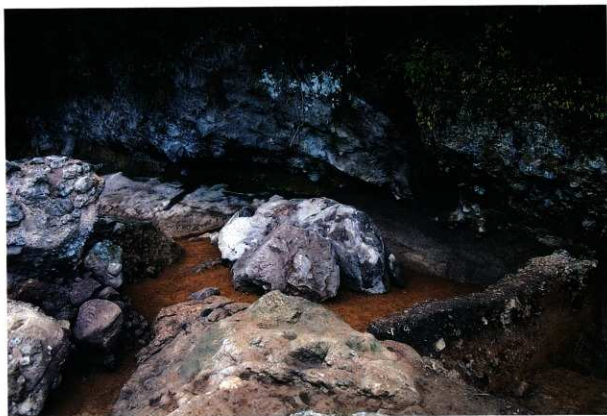
大分県教育庁埋蔵文化財センター



岩ノ下岩陰遺跡空中写真(遠景) 三叉路の上、後方中央の山は屋山城、その右下屋山長安寺



岩ノ下岩陰遺跡空中写真(近景) 写真中央 岩ノ下岩陰



岩ノ下岩陰遺跡 調査終了景観



岩ノ下岩陰 7 トレンチの層位

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受け、大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した、県道地蔵峠小田原線改良事業に伴う岩ノ下岩陰遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する豊後高田市長岩屋地区は、長岩屋川上流左岸の谷部に位置しており、天念寺や長安寺、都甲耶馬景等の豊かな歴史と自然に恵まれています。

今回調査した岩ノ下岩陰遺跡は、岩陰内にある遺跡です。

発掘調査の結果、縄文時代早期から現代に至る岩陰利用の変遷をみることができました。特に、縄文時代早期・後期の遺物を通じて縄文時代の人々の生活を窺うことができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成 20 年 3 月 25 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 福田 快次

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受け実施した豊後高田市長岩屋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴い、大分県教育庁文化課の依頼をうけ大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
3. 遺跡の実測、写真撮影、遺物の取り上げは発掘調査を担当した大分県教育庁埋蔵文化財センターの綿貫俊一と谷正和がこれを行った。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
4. 遺物の写真は綿貫俊一が行った。
5. 方位は真北である。
6. 出土遺物や記録類は大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書の執筆・編集は綿貫俊一・小柳和宏が行った。

目 次

第1章 はじめに	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要	
第1節 遺跡の状況と調査区の設定	4
第2節 遺跡の層位	4
第4章 遺構と遺物	
第1節 表土・I層の遺構と遺物	10
第2節 第II層の遺構と遺物	18
第3節 第III層の遺構と遺物	22
第4節 第IV・V・VI・VII層の遺構と遺物	27
第5節 包含層・水洗抽出遺物	32
表1 岩ノ下遺跡石器観察表	34
表2 岩ノ下遺跡中世～近世遺物観察表	37
第6節 太刀洗いの井戸	42
第5章 まとめ	
第1節 縄文時代の岩ノ下岩陰	43
第2節 中近世の岩ノ下岩陰	43
付篇1 岩鼻岩陰遺跡	44
付篇2 大分県岩鼻岩陰遺跡の動物遺体	45

挿図目次

第1図	岩ノ下岩陰遺跡と周辺の遺跡	3
第2図	遺跡周辺の地形と道路工事予定区間	5
第3図	発掘調査トレンチ配置図	6
第4図	5・6トレンチの層位	7
第5図	7トレンチの層位	8
第6図	8トレンチの層位	9
第7図	表土層・第I層の遺物平面分布	11
第8図	岩ノ下岩陰表土層・第I層の遺物(1)-現代・近代・近世の磁器・金属品	12
第9図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(2)-近世	13
第10図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(3)-近世	14
第11図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(4)-中世・縄文時代の土器	15
第12図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(5)-縄文時代の土器	16
第13図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(6)-縄文時代の石器	16
第14図	岩ノ下岩陰第I層の遺物(7)-縄文時代の石器	17
第15図	岩ノ下岩陰第II層の遺物平面分布	19
第16図	岩ノ下岩陰第II層の遺物(1)-縄文時代の土器	20
第17図	岩ノ下岩陰第II層の遺物(2)-縄文時代の石器	20
第18図	岩ノ下岩陰第II層の遺物(3)-縄文時代の石器	21
第19図	岩ノ下岩陰第III層の遺物平面分布	23
第20図	岩ノ下岩陰第III層の遺物(1)-縄文時代の土器	24
第21図	岩ノ下岩陰第III層の遺物(2)-縄文時代の石器	24
第22図	岩ノ下岩陰第III層の遺物(3)-縄文時代の石器	25
第23図	岩ノ下岩陰第III層の遺物(4)-縄文時代の石器	26
第24図	岩ノ下岩陰第IV・V・VI・VII層の遺物平面分布	28
第25図	岩ノ下岩陰第IV層の遺物(1)-縄文時代の土器	29
第26図	岩ノ下岩陰第IV層の遺物(2)-縄文時代の石器	29
第27図	岩ノ下岩陰第IV層の遺物(3)-縄文時代の石器	30
第28図	岩ノ下岩陰第V・VI層の遺物(1)-縄文時代の土器	30
第29図	岩ノ下岩陰第V層～第VII層の遺物-縄文時代の石器	31
第30図	岩ノ下岩陰包含層水洗抽出遺物(1)	32
第31図	岩ノ下岩陰包含層水洗抽出資料(2)	33
第32図	岩ノ下岩陰の採集資料とII・III層の追加資料	33
第33図	各層位出土石鏃(1)	39
第34図	各層位出土の石核	40
第35図	各層出土石鏃(2)	41
第36図	各層出土石器類	41
第37図	太刀洗いの井戸	42
第38図	岩鼻岩陰から出土した石鏃	44

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

I はじめに

1 発掘調査の経緯と経過

一般県道地蔵峠線は豊後高田市小田原と同市地蔵峠を結ぶ県道である。沿線には川中不動のある天念寺を始め、長安寺など中世の六部満山寺院等の国東半島仏教文化の史跡が多数存在すること、国東市国東町方面へのルートになっていたことから、近年交通量の増加と長岩屋付近における道路整備の必要性が指摘されていたところである。こうした地理上の重要幹線であることから豊後高田土木事務所では平成13年から道路改良を進めてきた。大分県教育庁埋蔵文化財センターは年度毎の工事予定地に対し、関係部局と調整を図りつつ、確認調査、試掘調査、立会調査を行っており、平成14年8月には天念寺遺跡内の桑原家墓地の本調査も行われた。岩ノ下岩陰遺跡は平成14年度の分布調査の段階では周知の遺跡から外れていたが、付近に天念寺やその坊跡が存在すること、縄文時代の土器片が採取されたことからこともあって試掘の必要なBランクとされた。経過は以下のとおりである。

大分県土木建築部建設政策課から平成16年4月28日付け試掘調査依頼が提出された(建政第380号)。これを受諾する平成16年6月3日付け通知(教委埋七第128号)を県土木部建設政策課に提出し、同年6月に試掘調査を行った。その結果、調査区から縄文時代の遺物が検出され、発掘調査が必要であることを建設政策課に通知した(教委埋七第128号)。大分県教育庁埋蔵文化財センターと大分県土木建築部建設政策課との協議の結果、平成17年5月16日から平成17年8月15までの予定で調査を行うことになった。

岩ノ下岩陰遺跡の発掘調査は平成18年7月3日に開始し、平成18年8月1日に終了した。

事業主体者 大分県豊後高田土木事務所

調査主体者 大分県教育庁埋蔵文化財センター

2 発掘調査の組織

埋蔵文化財センター

所長	渋谷忠章
次長兼総務課長	岡本義博
調査第一課長	栗田勝弘
調査一課一般事業担当副主幹	綿貫俊一
	嘱託 谷 政和

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

岩ノ下岩陰遺跡は大分県豊後高田市大字長岩屋字岩ノ下に所在する。

岩ノ下岩陰遺跡の所在する豊後高田市は国東半島西南部に位置する。国東半島は西側に周防灘、東側に別府湾・伊予灘が広がっている。半島の基部である南側には杵築市山香町が位置し、低い山地と狭小な谷間からなる地形が展開している。国東半島の中央部に休火山の両子山が位置しているが、永年の浸食で放射状の尾根となって延びている。この尾根の間は大小の谷となっており、尾根同様放射状に展開し、小河川が貫流している。

岩ノ下岩陰遺跡のある場所も同様で、都甲谷の支谷である長岩屋の谷も狭小な谷である。この谷のある地域は長岩屋と呼ばれるが、谷の北側には険しい都甲耶馬ともいわれる奇岩が東西に広がっている。狭小な谷間を長岩屋川が西流している。岩ノ下岩陰遺跡は川の左岸側の河岸段丘とその後背部の崖が長岩屋川に削られて形成された岩陰に立地する。岩陰は北面する。

第2節 歴史的環境

これまでのところ都甲地域を含めた周辺に散発的ながら人の痕跡が見られるのは縄文時代後期からで、都甲の入口にあたる来縄地区には来縄貝塚がある。また都甲地区の荒尾・払田条里遺跡三六田地区から縄文時代後期中頃の住居跡が検出されているほか、横田遺跡などで遺物が見つかっている。

弥生時代になると都甲谷にも居住痕跡がはっきりしてくる。荒尾・払田条里遺跡の森田地区では弥生時代前期末中期初頭の土器と土坑が検出される。スキサキ遺跡・小樋遺跡・横田遺跡・大平遺跡などでも集落が形成されている。また弥生時代後期から終末になると荒尾・払田条里遺跡内でも遺跡が増加してくる。森田地区、小畑地区、中津目地区、嶋廻地区などで、いずれも小規模遺跡である。

古墳時代になると都甲谷の低地部では集落が減少している。払田の中段段丘面に横穴式石室を有する払田鬼塚古墳群が造営されているので、谷低地部から山よりの微高地に集落が形成されたのだろう。

奈良時代に都甲地域は来縄郷に含められたほか、この頃には宇佐八幡・弥勒寺の封戸とされたと考えられる。この頃の遺物として都甲谷の入口付近に位置する荒尾・払田条里遺跡の嶋廻地区で8世紀後半の坏・蓋・瓦塔と格子目叩き痕のある平瓦などが検出されている。平安時代になると知恩寺で9世紀頃の古瓦が検出しており、小規模な古代寺院の存在が窺える。11世紀頃までには国東半島の六郷満山寺院の開山が始まったと推定され、都甲谷の天念寺や長安寺はそうした経緯のなかで建立されている。

鎌倉時代以降も都甲谷は平安時代以来の宇佐八幡・弥勒寺の荘園となっていたようである。室町時代15世紀には吉弘氏が都甲谷を安堵され、安土桃山時代まで続く。しかし安土桃山時代の末に朝鮮出兵時のミスから大友氏が没落し、文禄3年に豊臣秀吉が豊後を小藩に分割し、都甲谷は竹中重利が領有した。その後、慶長6年に細川忠興領、江戸時代に入って松平氏、天領と支配者が代わっている。



第1図 岩ノ下岩陰遺跡と周辺の遺跡

1. 岩ノ下岩陰 2. 岩鼻岩陰 3. 天念寺 4. 無道寺懸崖坊跡 5. 無動寺
6. 無動寺中畑坊跡 7. 屋山城 8. 長安寺 9. 箕城跡

第3章 遺跡の概要

第1節 遺跡の状況と調査区の設定

岩陰は東西に長く、堆積土の厚い西半部を主な調査区とした。試掘段階に遺物が出土した部分をカバーし、岩陰に直交するように幅3m・長さ4～5mの並列するトレンチを岩壁沿いに6ヶ所設定した。この他、洞外の三ヶ所に2m四角と2m×3mの試掘坑を設定し、遺物の広がりをみた。最も東側の試掘坑からは全く遺物は検出されなかった。岩陰中央の前底部にあたる2トレンチと3トレンチでは深さ1.5mまで下げたが、遺物は縄文時代後期の土器が大小の礫と混在する状況で散布していたにすぎない。したがって調査はトレンチ設定部分で集中して行うこととした。

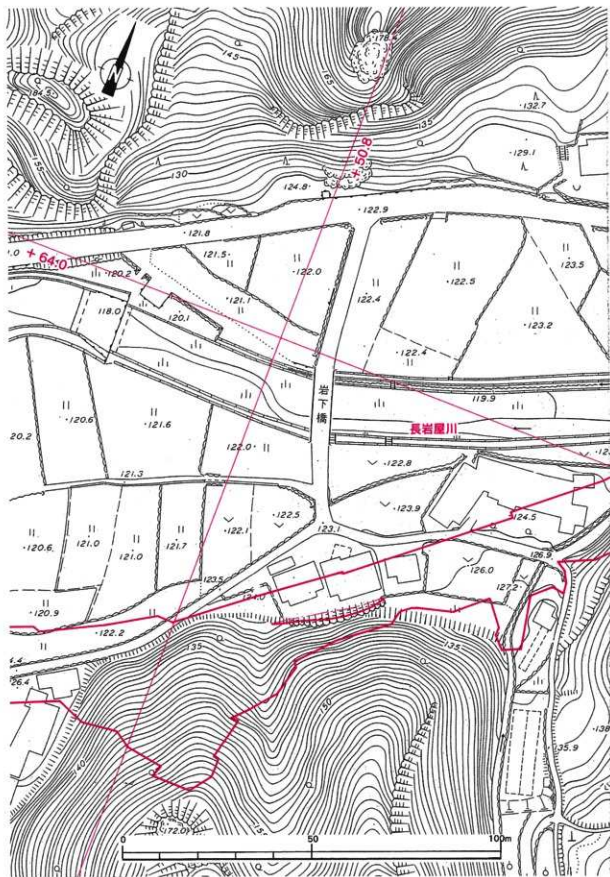
第2節 遺跡の層位

5トレンチ東壁の層位は次の通りである(第4図上段)。I層:暗褐色の表土・II層:黄褐色土で角礫混じり・II'層:各層が多量の礫の崩落によって攪乱されて形成・III層:暗灰色土・IV層:黄灰色土でV層の風化層・V層:アカホヤ・VI層:褐灰色砂質小角礫層、VII a層:灰色砂質土層、VII b層:明黄色角礫砂質土層で基盤直上層である。

6トレンチ東壁の層位は次のとおりである(第4図下段)。岩陰側の2m弱を除き膨大な落石・落盤によってズタズタに攪乱されている。I層:暗褐色の表土で攪乱層。II層:黄褐色土で角礫混じりの層。II'層:暗褐色が土壌の色調であるが、ほとんどが角礫からなる。II・III層が形成された後、庇の崩落による雨垂れラインの後退を継起とする崩落層。III層:暗灰色土は親指大の粒子を含み、大型礫は少ない。IV層:黄灰色土でV層の風化層。また親指大の粒子を含み、大型礫は少ない。V層:アカホヤで橙色。粒子の細かい層からなり、礫は基本的にない。VI層は褐灰色砂質小角礫層で、10cm前後から親指大の角礫と砂粒からなる。VII a層は灰色砂質土層で、粒子の細かい層。VII b層:明黄色角礫砂質土層で基盤直上層。VII b層は巨大な岩や大小角礫、砂粒からなる層で、基盤上の層と推定する。

7トレンチ東壁の層位は次のとおりである(第5図)。I層:暗褐色の表土である。I層表面から掘り込まれた土坑内に膨大な礫を埋めた礫堆がある。遺構の可能性もあるが、遺物もなく層位から考えて礫の廃棄土坑と考えた。II層:黄褐色土で角礫混じり・II'層:各層が多量の礫の崩落によって攪乱されて形成・III層は暗灰色土・IV層:黄灰色土でV層の風化層・V層:アカホヤ・VI層:褐灰色砂質小角礫層、VII a層:灰色砂質土層、VII b層:明黄色角礫砂質土層で基盤直上層である。

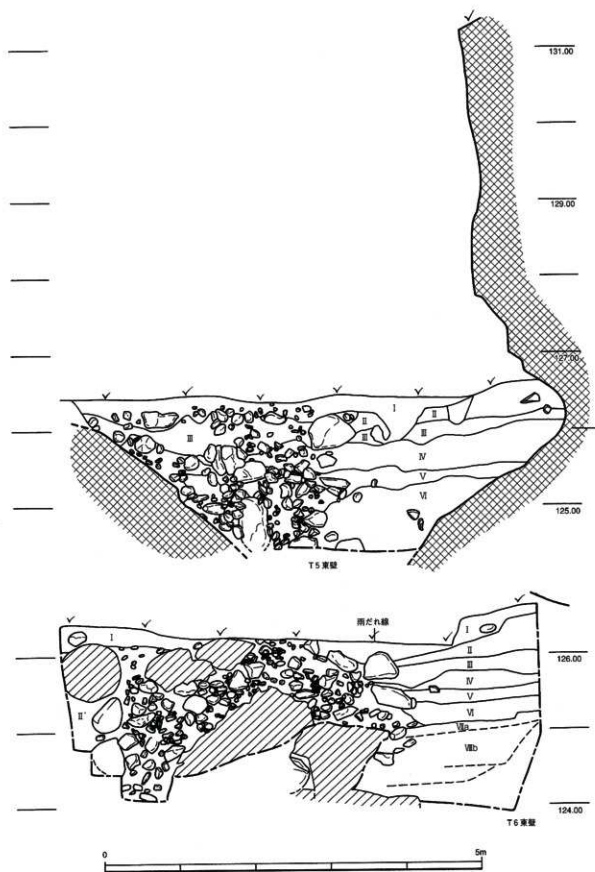
8トレンチ東壁の層位は次のとおりである(第6図)。I層:暗褐色の表土で攪乱層。II層:黄褐色土で角礫混じりの層。III層:暗灰色土は親指大の粒子を含み、大型礫は少ない。IV層:黄灰色土でV層の風化層。また親指大の粒子を含み、大型礫は少ない。V層:アカホヤで橙色。粒子の細かい層からなり、礫は基本的にない。VI a層は褐灰色砂質土層で、10cm前後から親指大の角礫と砂粒からなる。VI b層は灰色砂質土層で、粒子の細かい層。II b層～II'層としたが、III層の変色部分である可能性も高い。



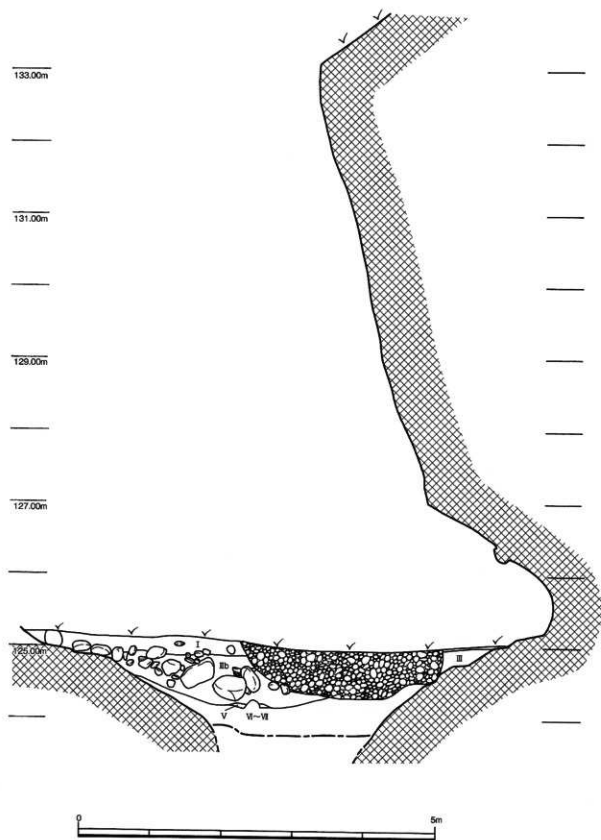
第 2 図 遺跡周辺の地形と道路工事予定区間



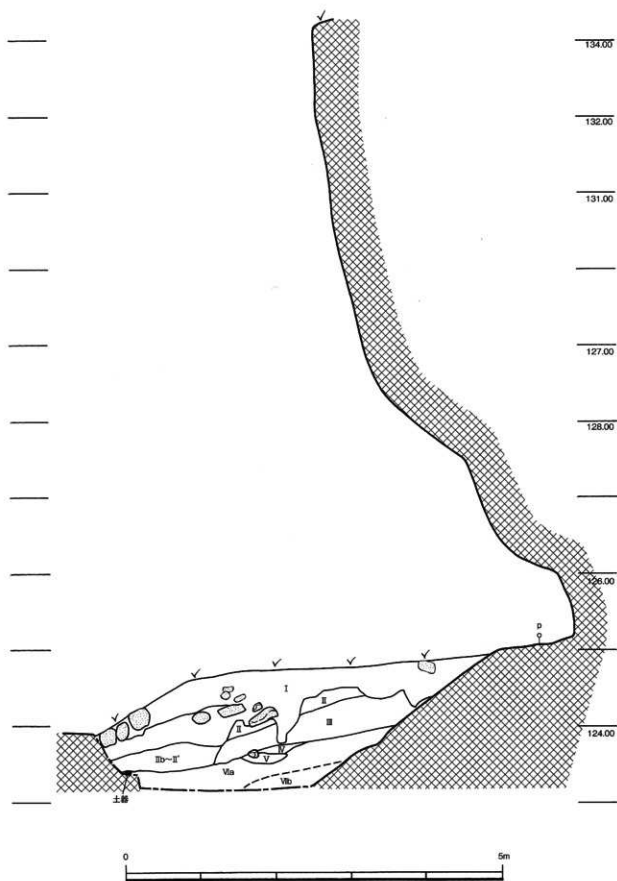
第3図 発掘調査トレンチ配置図



第4図 5・6トレンチの層位



第5図 7トレンチの層位



第6図 8トレンチの層位(西断面)

第4章 遺構と遺物

第1節 表土・第I層の遺構・遺物

分布 第I層遺物は地表面からその直下にかけての出土している。最も集中しているのは9トレンチの岩陰よりの部分である。この地点に近世以降の高村焼焙烙や近世陶磁器が集中的に分布する。こうした近世陶磁器に混在して縄文時代後期の土器・石器が出土している。この混在層を除去すると縄文時代後期の遺物の多い層となる。

その次に分布するのは6・7トレンチの前底部よりの部分であるほか、このトレンチ壁際で中世人骨と土師器が局地的に集中分布していた(第7図)。この中世人骨が出土した部分は岩陰の天井部分の岩が部分的に崩落し、岩壁との間に挟まれた狭小な部分に位置していた。

近世・近代初頭の遺物 8図1は白磁蓮弁染付け皿で、明治前半から大正時代後半か。2は型紙摺りの染付け碗であり、明治時代前半か。3は型紙摺りの染付け碗であり、明治時代前半か。4は肥前産反碗で、1810～1860年頃の年代か。5・6は陶胎染付け碗で、18世紀前半か。7はコンニャク印判による碗で、18世紀前半頃か。8は佐佐見焼青磁大皿で、1630～1650年頃の年代か。

近世の遺物 最近まで岩陰前に宅地を構えていた居住者が岩陰に小屋掛けして納屋や簡単な塵処理場として使っていたため近世から現代に及ぶ什器類が出土している。第9図1から6、第10図14から18は「こね鉢」である。3から6には胴部下位に指刻みの突帯を1条廻らせている。底部は第9図2、第10図14から18やのように高台となる。中には第9図15や16のように二重に高台を付すものもある。口縁端部はいずれも小さく折り返し、丸みを帯びている。胴部外面はヘラ削り、内面は丁寧な磨きが施されている。第10図2から6は「焙烙」である。2、5、6には木製(?)の柄を差し込む中空の把手が付き、口縁端部は小さく内側に曲げられるものが多い。外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。第10図1と7から12は口縁部であるが、想定される器種としては「こね鉢」、「焙烙」、「甕」、「カメゼイロ(蒸籠)」があげられる。小さな破片では同定が難しいが、12は「焙烙」か。第10図13は「カメゼイロ」と考えられる。同19は「甕」か。第10図20は瓦質土器火鉢。同21は土師質の釜である。(小柳)

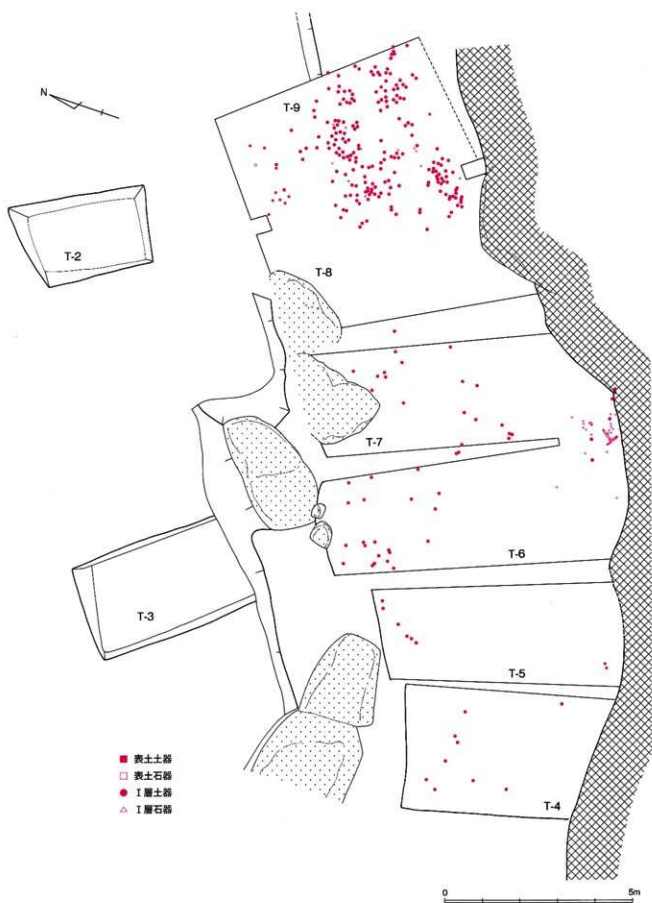
中世前半の遺物 第11図1は瓦器碗。しっかりした高台が附く。同2と3は小皿で、2は底部に焼成後に穿孔がある。同4から11は土師器杯。なお法量は以下のとおりである。

11図1は断面三角形の高台が付く瓦器碗。11図2～11は一括して採取された土師器で糸切り難しである。うち2・3は小皿である。2には底部ほぼ中央に焼成前穿孔があり、外面が屈曲する。2は口径8.5cm・底径5.7cm・器高2.2cmである。3は口径8.6cm・底径6.9cm・器高1.4cmである。11図5は口径11.6cm・底径5.9cm・器高2.85cmである。6は口径11.6cm・底径7.9cm・器高2.7cmである。7は口径14.1cm・底径9.2cm・器高4.0cmである。11図8口径12.6cm・底径9.6cm・器高2.85cmで、9は口径13.0cm・底径9.1cm・器高2.5cmである。10は口径13cm・底径10cm・器高2.7cmである。11は口径12.6cm・底径9.6cm・器高2.85cmである。

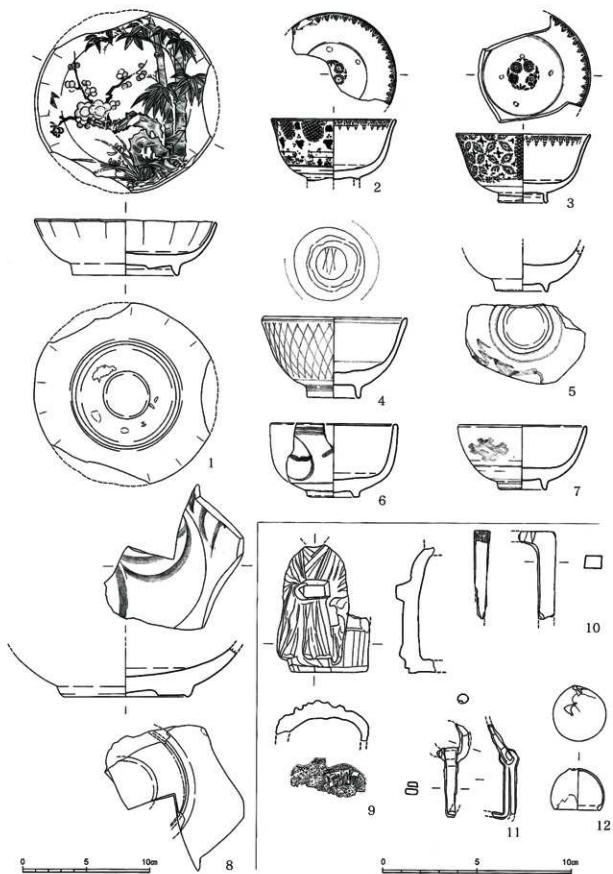
以上の器形や法量の特徴から14世紀頃の土師質土器であろう。(小柳)

縄文時代の遺物 第11図12は縄文後期の鉢の破片。13は縄文晩期の浅鉢で、口唇端部に刻みがある。14・15は晩期深鉢の底部である。17は後期中頃辛川式土器の鉢で、胴部から頸部にかけての破片。16・19・20は後期辛川式土器の鉢で、ヘナタリによる擬似縄文がみられる。18は時期布不明ながら、表面に縄文が施される。21は粗製深鉢の胴部上半部破片で、肩部の屈曲部分。

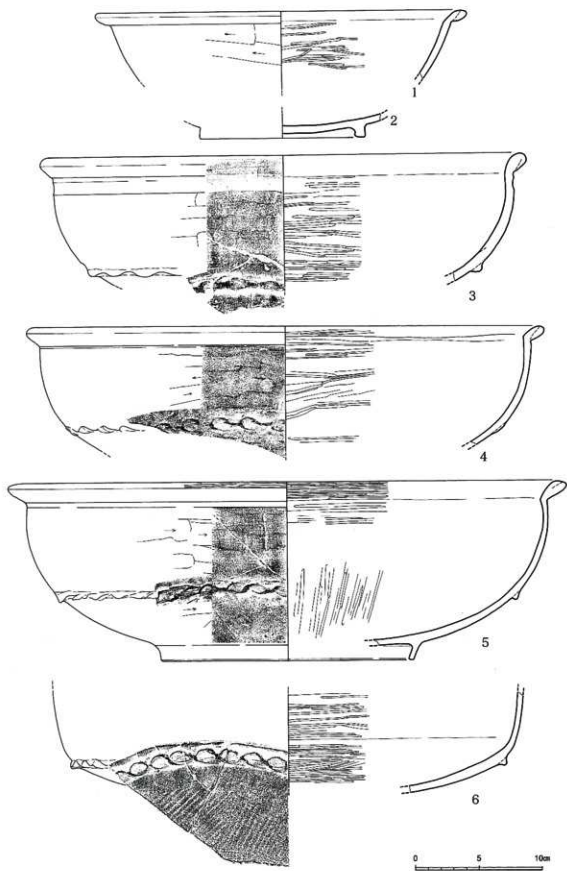
第12図の1は凹点がみられるので国東市羽田遺跡の報告でⅣ類とされたものに相当する羽島下層Ⅱ式土器に並行する土器である(国東町教育委員会1990)。2は前期の野口阿多タイプとされる土器の破片である。3は前期の轟4式土器の破片である。4も前期土器と推定される丸底の底部破片である。5も後期、または前期の土器破片と推定されるが、時期ははっきりしない。



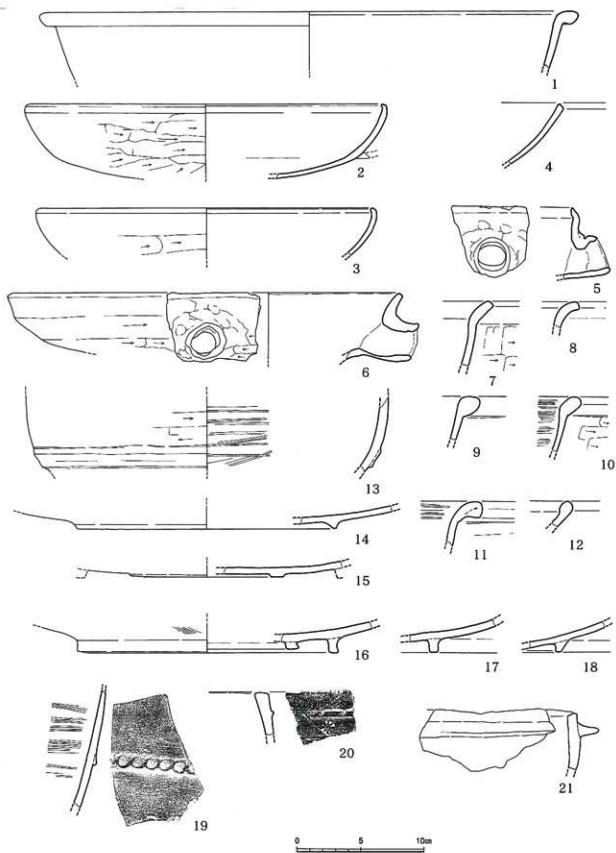
第7図 表土層・第1層の遺物平面分布



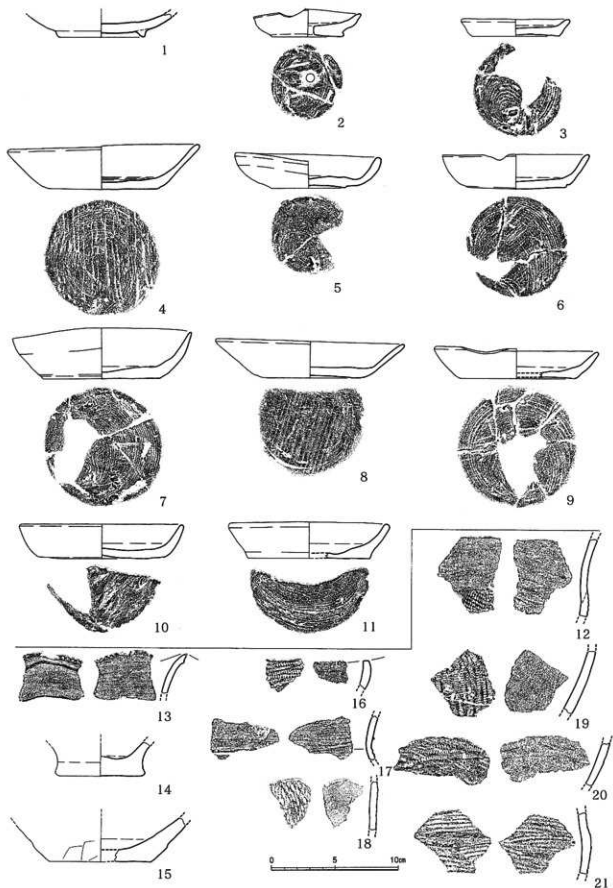
第8図 岩ノ下岩陰表土層・第1層の遺物(1)



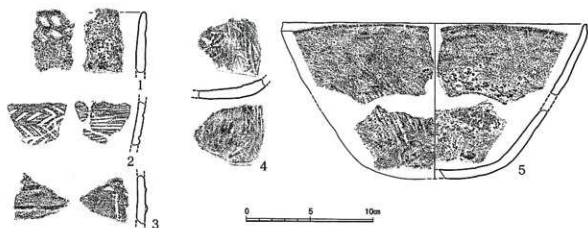
第9図 岩ノ下岩陰1層の遺物(2) -近世-



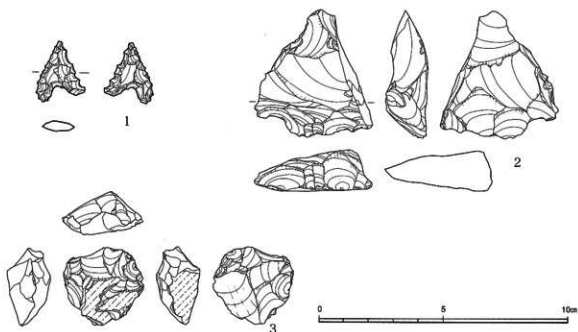
第10図 岩ノ下岩陰I層の遺物(3) -近世-



第 11 図 岩ノ下岩陰第 I 層の遺物(4) -中世・縄文時代の土器-

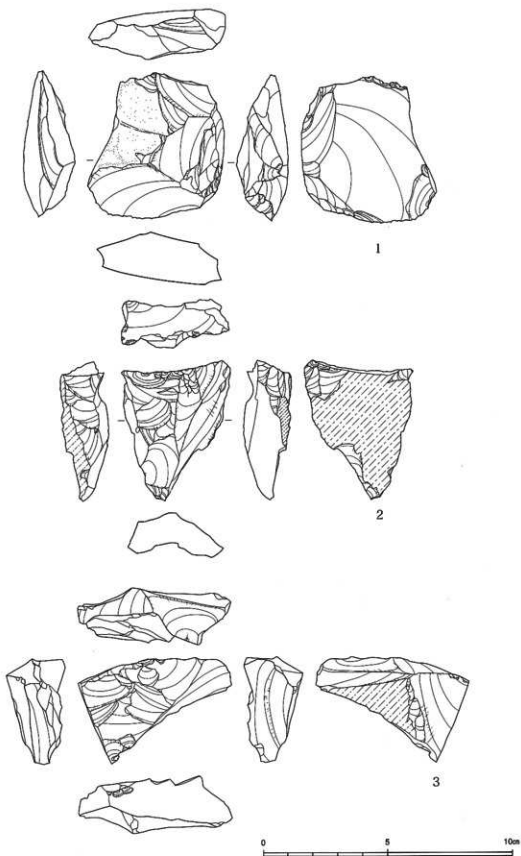


第12図 岩ノ下岩陰第1層の遺物(5) -縄文時代の土器-



第13図 岩ノ下岩陰第1層の遺物(6) -縄文時代の石器-

第13図1は姫島産黒曜石を用いた石鏃である。2はやはり姫島産黒曜石を用いたスクレーパー。3も同じく姫島産黒曜石を用いた石核である。第14図1～3も姫島産黒曜石を用いた石核。いずれも同様な剥片をもとに打面を作出し、不定形の剥片を剥離している。



第 14 図 岩ノ下岩陰第 1 層の遺物 (7) - 縄文時代の石器 -

第2節 第Ⅱ層の遺構・遺物の分布

分布 第1層の遺物分布で最も集中していたのは9トレンチの岩陰よりの部分であるが、第Ⅱ層になると遺物は全てのトレンチに遺物の集中部分の分布が広がり、地表面からその直下にかけて出土している(第15図)。出土遺物はすべて縄文時代の遺物である。とりわけ7・6トレンチの岩壁沿いに遺物が帯状に広がっていた。この遺物には姫島産黒曜石のチップ・剥片が多数出土しており、石器の製作と剥片剥離を集中的に行った場所と推定できる。

縄文時代の遺物 第16図1は縄文後期の辛川式土器の鉢の破片。

2・3は縄文前期羽鳥下層式土器の深鉢破片で、口縁部の波頂部直下に垂下するように三つの「O」字形の浮文がついているほか、細かい刺突も見られる。器面調整は条痕調整である。

4は米粒状の痕跡が長く連続する縄文を施す。おそらく縄文時代中期の船元式土器の破片であろう。5は縄文時代晩期の深鉢の底部破片である。

6・7は前期の轟4式土器の破片で、平行する隆線がみられる。

8は無文土器の深鉢破片である。

第17図1は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.46gである。右脚を欠く。

第17図2は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.79gである。

第17図3は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.61gである。先端を欠く。

第17図4は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.52gである。完形品。

第17図5は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.97gである。先端を欠く。

第17図6は姫島産黒曜石を用いた石鏃の未完成品で、重さは2.05gである。先端を欠く。

第17図7は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.72gである。先端と下半を欠く。

第17図8は姫島産黒曜石の剥片で礫面を残す。重さは15.86gである。

第17図9は姫島産黒曜石の剥片で、重さは7.05gである。

第18図1は姫島産黒曜石の剥片で、重さは7.05gである。

第18図2は姫島産黒曜石の剥片で、重さは5.05gである。姫島産黒曜石特有の節理が表面・裏面にある。

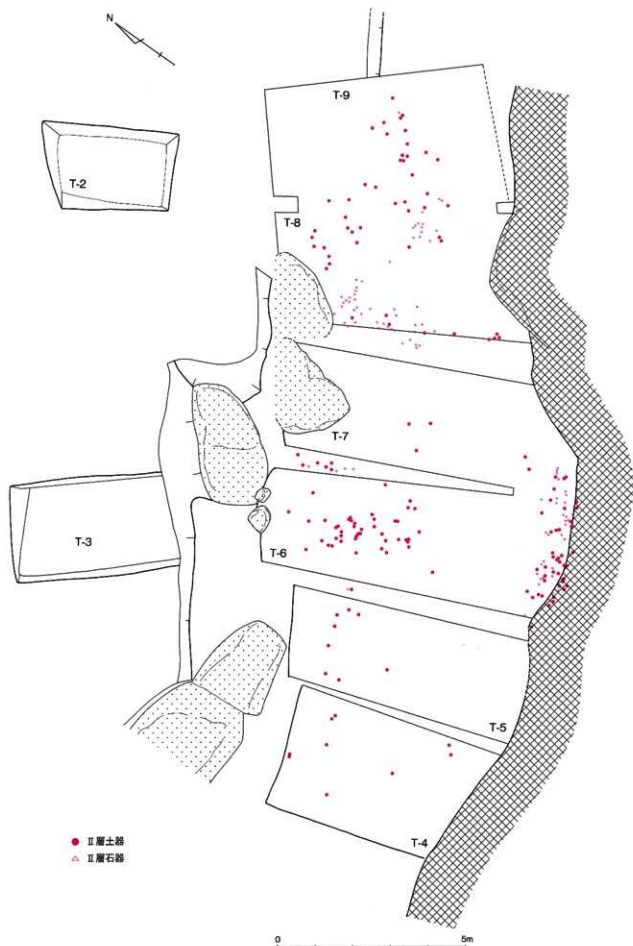
第18図3は珪化木の剥片で、重さは5.21gである。

第18図4は姫島産黒曜石の剥片で、重さは5.16gである。

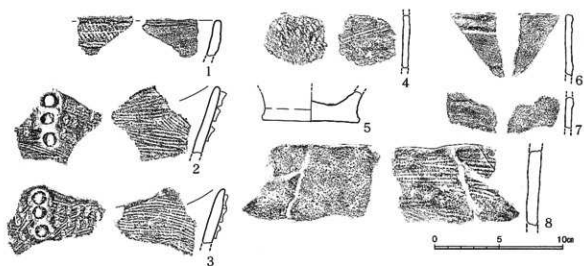
第18図5は姫島産黒曜石の剥片で、重さは4.25gである。

第18図6は姫島産黒曜石の石核で、重さは9.15gである。不定形剥片を剥離した石核。

第18図7は姫島産黒曜石の石核で、各面からの剥離によって直方体の残核となっている。重さは201.88gであり、本遺跡で最大の石核。



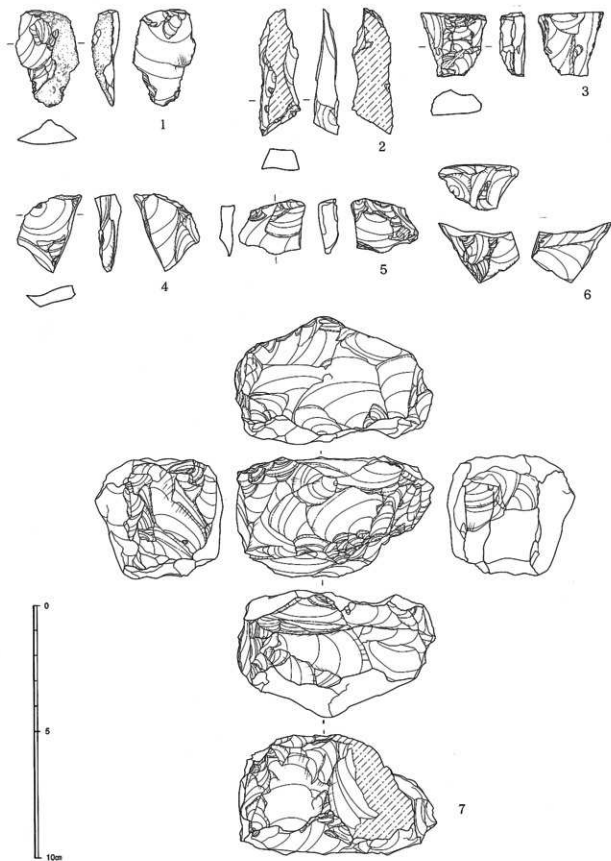
第15図 岩ノ下岩陰第II層の遺物平面分布



第16図 岩ノ下岩陰第Ⅱ層の遺物(1) -縄文時代の土器-



第17図 岩ノ下岩陰第Ⅱ層の遺物(2) -縄文時代の石器-



第18圖 岩ノ下岩陰第II層出土遺物(3) -縄文時代の石器-

第3節 第Ⅲ層の遺構・遺物の分布

分布 第Ⅲ層になると遺物は5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ・8トレンチ・9トレンチで遺物の集中部分が認められ、また遺物が量的にも増加している(第19図)。ただし、6トレンチでは壁際とトレンチの北端部を除くとほとんど遺物がない。断面をみると著しい落石によって正常な土層堆積がわずたずたとなっていることに深い関係があろう。特に興味深いのは7トレンチの壁際よりで、姫島産黒曜石のチップや剥片が密集して出土しており、石器製作址の存在を示すものだろう。この姫島産黒曜石のチップや剥片が密集する部分は上位の2層の分布と重なり、同一の時期と考えられる。出土遺物はすべて縄文時代の遺物である。

縄文時代の遺物 第20図1は表面が剥落して明確でないが、器形から弥生時代後期末以降の土師器と推定される。トレンチの中央部分の落石の多い場所での出土しており、本来の出土層位と異なる可能性が高い。

第20図2は国東市羽田遺跡で縄文前期の羽鳥下層式土器に伴う条痕調整の無文土器に似た調整である。

第20図3は器面調整を巻貝のヘナタリ等で調整した土器で、縄文時代前期の前半から中頃に観察される。

第20図4は巻貝による曲線的な沈線が施されている。縄文時代後期中頃の辛川1式土器に伴うものだろう。

第20図5は複合鋸歯状に短い沈線区画し、平行させていく特徴から縄紋時代前期の曾畑式土器である。

第20図6も複合鋸歯状に短い沈線区画し、平行させていく特徴から縄紋時代前期の曾畑式土器である。

第20図7は縄文時代前期の轟4式土器の破片で、条痕調整後に水平に隆線がみられる。

第20図8は縄文時代晩期～弥生時代早期の深鉢の破片である。底部が上げ底になる。

第20図9は縄文時代晩期～弥生時代早期の深鉢の口縁部破片である。

第20図10は縄文時代晩期～弥生時代早期の深鉢の胴部の屈曲部破片である。

第21図1は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.4gである。先端を欠く。

第21図2は姫島産黒曜石を用いた石鏃の未成品で、重さは0.3gである。先端と左脚を欠く。

第21図3は姫島産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.24gである。先端から左半分を欠く。

第21図4は姫島産黒曜石の剥片で礫面を残す。重さは0.29gである。先端を欠くか。

第21図5は姫島産黒曜石の剥片で、重さは0.34gである。ほとんど素材の原型を残す。

第21図6は姫島産黒曜石の剥片で、重さは0.24gである。先端と右脚を欠く。

第21図7は姫島産黒曜石の剥片で、重さは0.67gである。

第21図8は姫島産黒曜石の剥片で、重さは0.59gである。上半部を欠く。

第21図9は姫島産黒曜石の剥片で、重さは3.21gである。基部が無脚式の石鏃、または未成品か。

第21図10は姫島産黒曜石の剥片で、重さは1.43gである。

第22図1は姫島産黒曜石のエンド・スクレーパー。

第22図2はサヌカイトのスクレーパー。

第22図4は矽化木を石材とする加工痕ある石器。

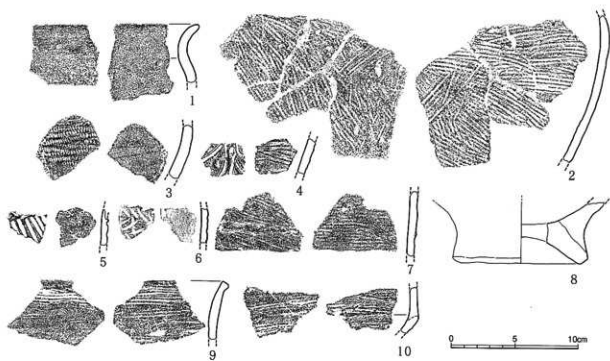
第22図3・5・6は剥片。

第23図1～4は姫島産黒曜石を石材とする剥片。

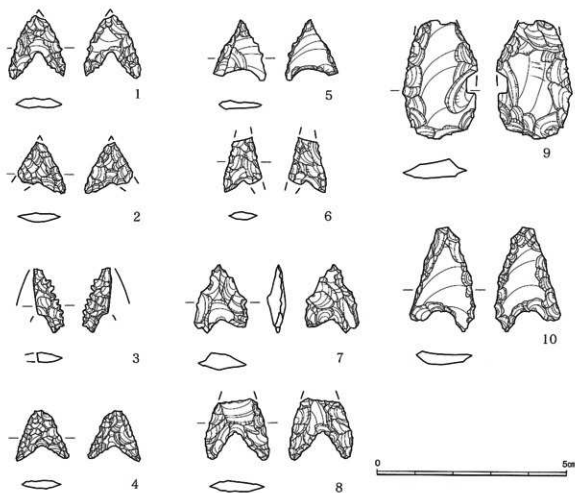
第23図は石核。



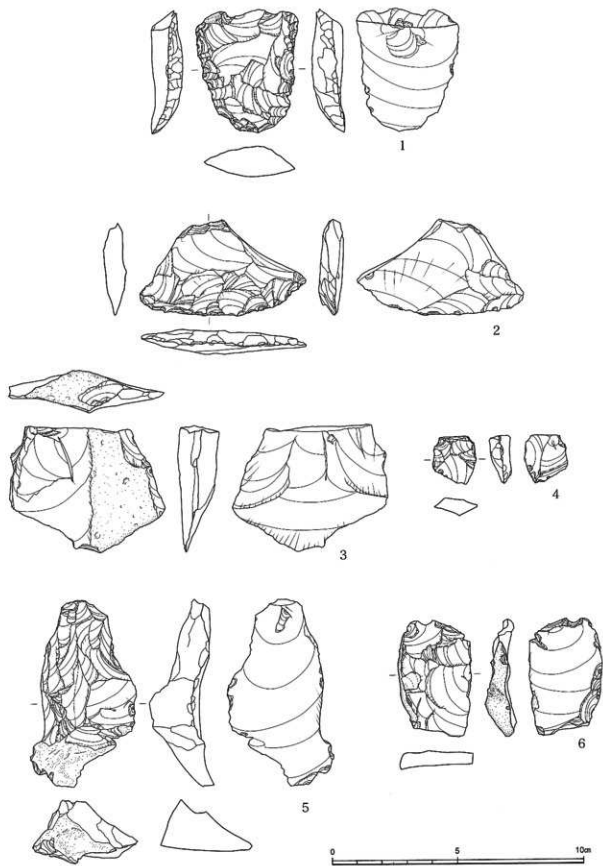
第 19 図 岩ノ下岩陰第Ⅲ層の遺物平面分布



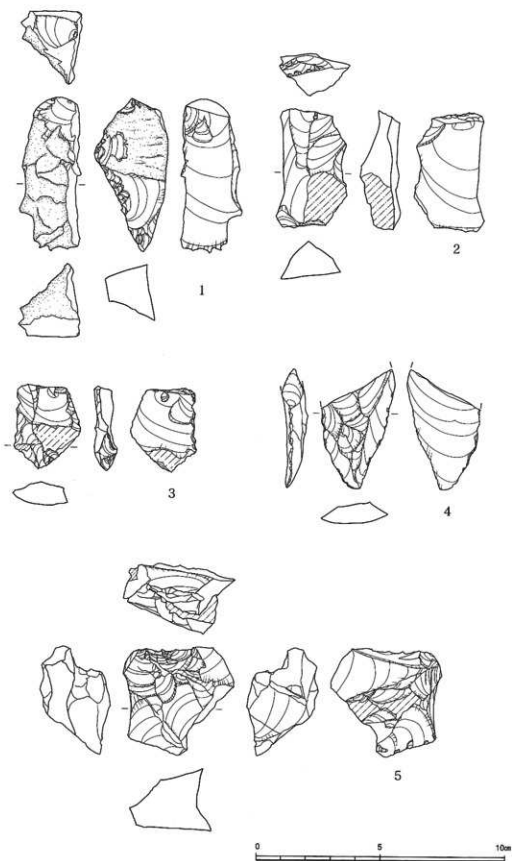
第20図 岩ノ下岩陰第三層の遺物(1) -縄文時代の土器-



第21図 岩ノ下岩陰第三層の遺物(2) -縄文時代の石器-



第 22 図 岩ノ下岩陰層の出土遺物 (3)



第 23 図 岩ノ下岩陰川層の遺物 (4)

第4節 第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層の遺構・遺物

分布 第Ⅳ層になると遺物は5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ・8トレンチ・9トレンチで遺物の集中部分認められ、また遺物が量的にも増加している(第24図)。ただし、Dトレンチの壁際とトレンチの北端部を除くとほとんど遺物がない。断面をみると著しい落石によって正常な土層堆積がずたずたとなっていることに深い関係がある。特に興味深いのはCトレンチの壁際より、姫烏産黒曜石のチップや剥片が密集して出土しており、石器製作址の存在を示すものだろう。この姫烏産黒曜石のチップや剥片が密集する部分は上位のⅡ層の分布と重なり、同一の時期と考えられる。出土遺物はすべて縄文時代の遺物である。

縄文時代の遺物 第25図1は波状口縁の深鉢である。胴の上部が張り、頸部から口縁部が立ち上がりながら開く。口縁部紋様帯は二条沈線間に縄文を残し、波状沈線を巡らす磨り消し縄文である。胴部紋様帯は平行沈線間を斜状沈線で三角形に区画し、内側に縄文を残した磨り消し縄文土器である。以上の特徴から辛川1式土器かと思われる。

第25図2は縄文時代晩期の条痕調整の無文土器か。

第25図3は米粒状の縄文で、軌跡が長く連続する。おそらく縄文時代中期の船元式土器の破片であろう。

第25図4は横方向の条痕で、縄文時代晩期の条痕調整の無文土器か。

第25図5～7は条痕調整後、平行する隆線を貼り付けた深鉢であり、轟4式土器か。

第26図1は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、重さは0.37gである。挟りが浅い。

第26図2は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、先端部が破損している。重さは0.66gである。挟りが半円形である。

第26図3は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、左脚部が破損している。重さは0.72gである。挟りが半円形である。

第26図4は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、左脚部が破損している。重さは0.35gである。挟りが三角形である。

第26図5は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、先端部が破損している。重さは1.01gである。挟りが三角形である。

第26図6は姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、先端部が破損している。重さは3.8～3gである。挟りが半円形である。

第26図7は姫烏産黒曜石を用いた石鏃の未完成品で、断面に急角度の部分やステップが生じたままとなっている。重さは3.17gである。

第26図8は姫烏産黒曜石を用いた石鏃の未完成品で、左側縁・近位端・表面下半に若干の剥離が施されているに過ぎない。素材以前・素材時の面を広く残しており、小型の三角形の剥片素材であることがわかる。重さは3.23gである。

第26図9は姫烏産黒曜石を用いた石器の存在を窺わせるチップである。

第27図1は姫烏産黒曜石を用いた石核で、不規則な破損をしている。剥片剥離も多方向であり、一定のパターンはない。重さは21.93gである。挟りが半円形である。

第27図2は姫烏産黒曜石を用いた「ノ」字状剥片で、大きな凹凸もなく均一的な厚さである。石鏃製作作用の素材か。重さは4.23gである。

第27図3も姫烏産黒曜石を用いた「ノ」字状剥片で、石鏃製作作用の素材か。重さは3.83gである。

第27図4は姫烏産黒曜石を用いた石鏃の未完成品か。製作作用の素材か。重さは8.66gである。

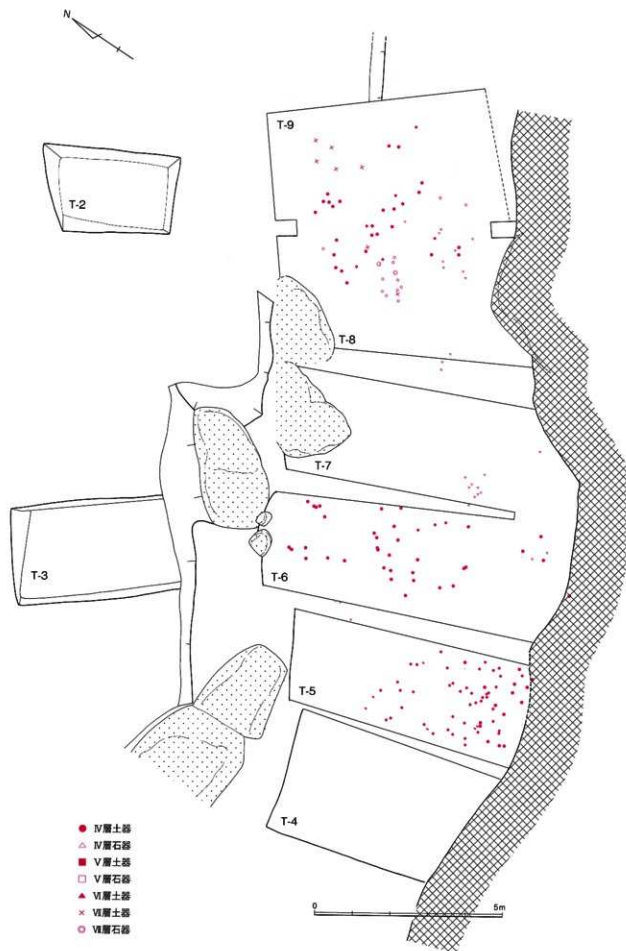
第27図5は姫烏産黒曜石の石核で、表裏両面の様々な角度から剥片剥離を行なう。重さは30.51gである。

第28図上段はⅤ層出土の縄文時代の土器である。第28図1・2は同一個体で、羽鳥下層式土器と考えられる。

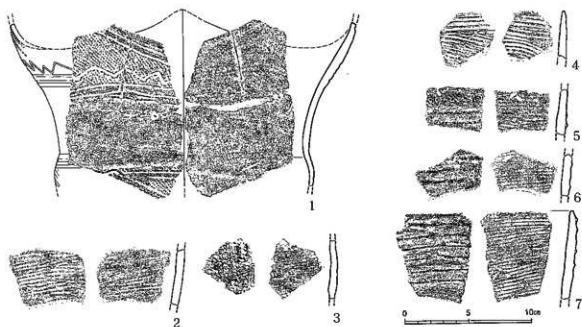
第28図3は米粒状の縄文が施され、おそらく船元式土器の破片であろう。

第28図4は山形押型文土器である。第28図下段はⅥ層出土の土器で、いずれも山形押型文土器である。本遺跡では楕円押型文土器はみられず、古い様相を示す。

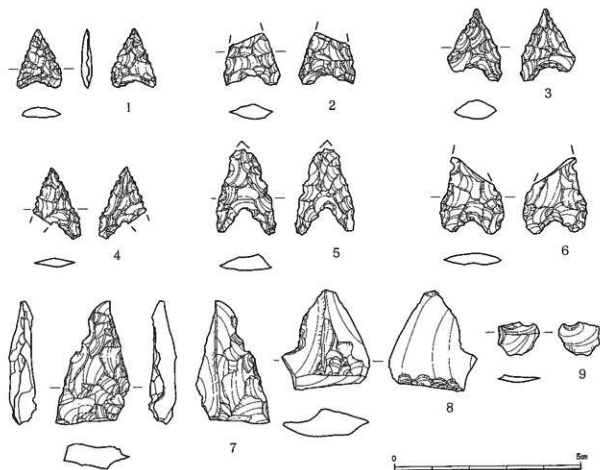
第29図1はⅤ層出土で、姫烏産黒曜石を用いた石鏃で、脚部外縁が鋸歯状を示す。重さは0.79gである。



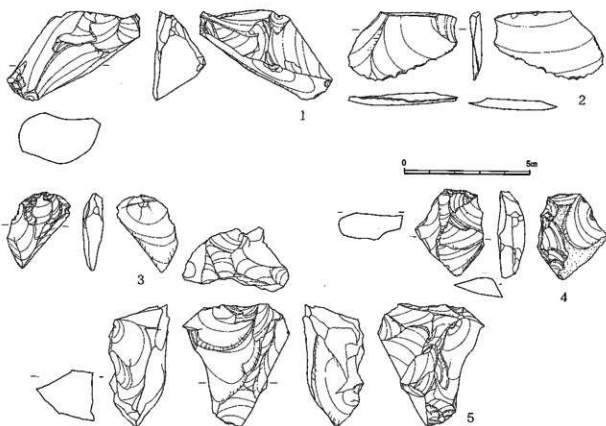
第 24 図 第 IV・V・VI・VII 層の遺物平面分布



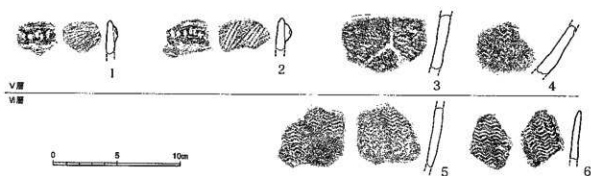
第 25 図 岩ノ下岩陰第Ⅳ層出土の遺物 (1)



第 26 図 岩ノ下岩陰第Ⅳ層出土の遺物 (2)



第27図 岩ノ下岩隆IV層出土の遺物(3)



第28図 岩ノ下岩隆V・VI層出土の遺物

第29図2は石鏃の未成品。

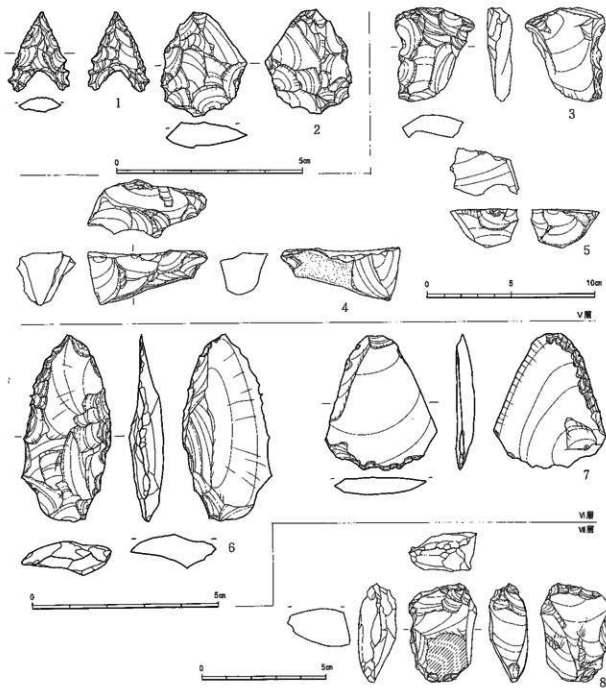
第29図3はスクレーパーか。

第29図4・5は姫島産黒曜石を石材とする小形の石核。

第29図6はスクレーパー～尖頭器か。

第29図7はエンドスクレーパーである。

第29図8はクサビ形石器である。



第29図 岩ノ下岩層V～VI層の遺物

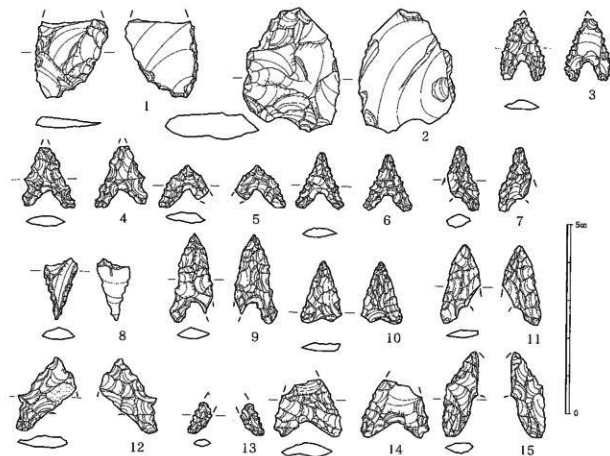
第5節 包含層水洗抽出資料

岩の下岩除遺跡では各層位別に包含層の掘り下げを行った。遺跡の特性から獣骨・炭化物・種子類の出土が予想されたので、廃土の水洗作業を行い資料の抽出に努めた。しかし、思いの外包含状態が芳しくなく、自然遺物類はほとんど採取できなかった。ところが、調査にあたっては注意深い掘り下げであったにも関わらず、夥しいチップ類を中心に若干の石鏃類や土器片も混じって回収された。チップ類は10mmから1mmまでの網に懸かる大きさのものであった。それこそ鱗状のチップ類であり、数袋のチップ類はあたかも「砂袋」のような観を呈していた。

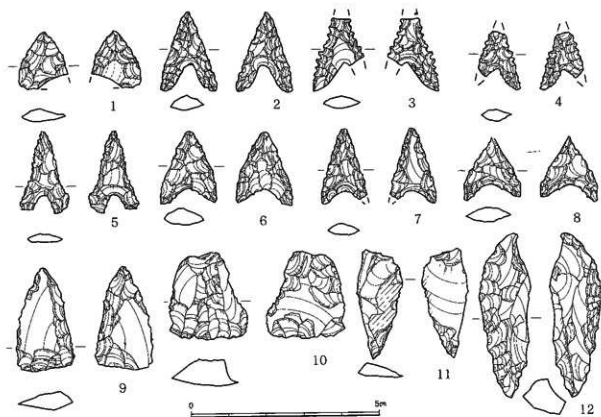
調査で原位置を確認して取り上げた石器・剥片・チップもかなりな量であり、5cm以上の大きさをもつ剥片はほとんど見受けられなかったが、今回の包含層水洗抽出資料の観察でも5cm以上のものは一切なかった。したがって鱗状の極小チップは石鏃を中心とした押圧剥離に関するものと考えられる。ここでは水洗で抽出された資料のうち、石鏃類などの小型剥片石器を報告する。

第30図1・2は石鏃の未完成品で、2はやや脚部作出の意図が窺える。第30図3～7・9～15、第31図2～8は凹基式石鏃である。第30図8は極小の石鏃に該当しよう。第31図9は平基式か宋成品。第31図10も石鏃の未完成品。第31図の11は石鏃の未完成品、12は石鏃の成品か。以上、水洗抽出遺物を概観したが、いずれも姫島産黒曜石を石材としている。表裏両面に押圧剥離以前の剥離痕の観察される例があるが、剥離方向が90度ずれている例がある。角礫状の石核から剥片剥離作業を行ったことが推定される。

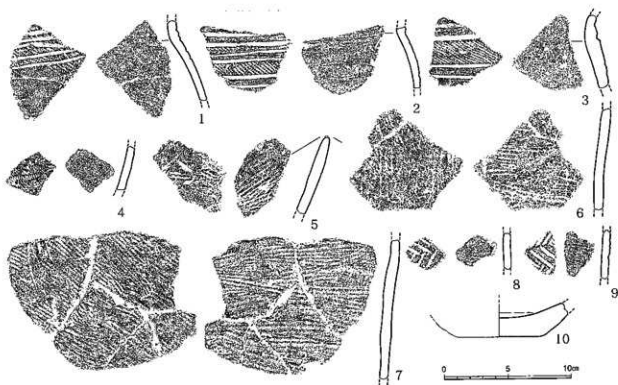
土器片は基本的に各層位ごとの土器と同様である。5は波状口縁土器で、7は縄文時代早期の土器か。



第30図 岩ノ下岩除包含層水洗抽出遺物 (1)



第31圖 岩ノ下岩層包含層水洗抽出資料(2)



第32圖 岩ノ下岩層の採集資料とⅡ・Ⅲ層の追加資料

表1 岩ノ下遺跡 石器観察表

検出番号	遺物番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
13-1	D-5.171.Ⅰ層	石鏃	2.5	2	0.4	0.4	短島産黒曜石
13-2	C-5.196.Ⅰ層	スクレーパー	5.1	4.7	1.6	28.21	短島産黒曜石
13-3	C-5.29.Ⅰ層	スクレーパー	3.1	3.2	1.8	12.45	短島産黒曜石
14-1	D-6.8.Ⅰ層	石核	5.7	5.4	2	52.46	短島産黒曜石
14-2	C-5.39.Ⅰ層	石核	5.6	4.4	1.9	31.92	短島産黒曜石
14-3	B-5.138.Ⅰ層	石核	4.2	6.2	2.3	32.05	短島産黒曜石
17-1	C-5.194.Ⅱ層	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.46	短島産黒曜石
17-2	T-9.Ⅱ層	石鏃	2	1.2	0.6	0.79	短島産黒曜石
17-3	C-6.249.Ⅱ層	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.61	短島産黒曜石
17-4	T-6.Ⅱ層	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.52	短島産黒曜石
17-5	D-5.54.Ⅱ層	石鏃	1.9	1.7	0.4	0.97	短島産黒曜石
17-6	B-5.102.Ⅱ層	石鏃	1.9	1.9	0.5	2.05	短島産黒曜石
17-7	C-5.173.Ⅱ層	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.72	腰岳産黒曜石
17-8	B-6.119.Ⅱ層	剥片	4.3	3	1.3	15.86	短島産黒曜石
17-9	B-5.6.Ⅱ層	剥片	2.7	4.4	0.6	7.05	短島産黒曜石
18-1	B-5.101.Ⅱ層	剥片	3.8	2.5	1	7.05	短島産黒曜石
18-2	B-5.133.Ⅱ層	剥片	5	1.6	0.8	5.95	短島産黒曜石
18-3	B-6.97.Ⅱ層	剥片	2.6	2.6	1	5.21	珪化木
18-4	B-5.58.Ⅱ層	剥片	3.1	2.6	0.8	5.16	短島産黒曜石
18-5	B-6.89.Ⅱ層	剥片	2.2	2.6	0.6	4.25	短島産黒曜石
18-6	B-5.26.Ⅱ層	石核	2.4	3.2	1.8	9.15	短島産黒曜石
18-7	C-5.153.Ⅱ層	石核	5.1	7.9	5.1	201.88	短島産黒曜石
21-1	C-5.134.Ⅲa層	石鏃	1.6	1.5	0.25	0.4	短島産黒曜石
21-2	C-6.32.Ⅲa層	石鏃	1.35	1.2	0.25	0.3	短島産黒曜石
21-3	D-6.25.Ⅲ層	石鏃	1.6	0.7	0.25	0.24	短島産黒曜石
21-4	C-6.4.Ⅲa層	石鏃	1.35	1.4	0.2	0.29	腰岳産黒曜石
21-5	C-6.40.Ⅲb層	石鏃	1.6	1.4	0.25	0.36	短島産黒曜石
21-6	B-6.34.Ⅲ層	石鏃	1.45	1	0.2	0.24	短島産黒曜石
21-7	D-5.22.Ⅲ層	石鏃	1.75	1.4	0.45	0.67	短島産黒曜石
21-8	C-5.125.Ⅲa層	石鏃	1.6	1.65	0.3	0.59	短島産黒曜石
21-9	B-6.14.Ⅲ層	石鏃未成品	3.05	1.9	0.5	3.21	短島産黒曜石
21-10	B-6.32.Ⅲ層	石鏃	2.7	1.7	0.3	1.43	短島産黒曜石
22-1	D-5.49.Ⅲ層	エンド・スクレーパー	4.8	4.1	1.2	22.31	短島産黒曜石
22-2	C-6.197.Ⅲ層	スクレーパー	3.85	6.65	1	20.28	サスカイト
22-3	C-6.31.Ⅲa層	剥片	4.9	6.2	1.7	38.31	サスカイト
22-4	C-6.11.Ⅲa層	加工痕ある石器	1.95	1.75	0.7	0.77	珪化木
22-5	C-5.163.Ⅲ層	剥片	7.4	4.2	2.5	37.98	短島産黒曜石
22-6	B-5.124.Ⅲa層	剥片	4.65	2.9	1.25	11.75	短島産黒曜石

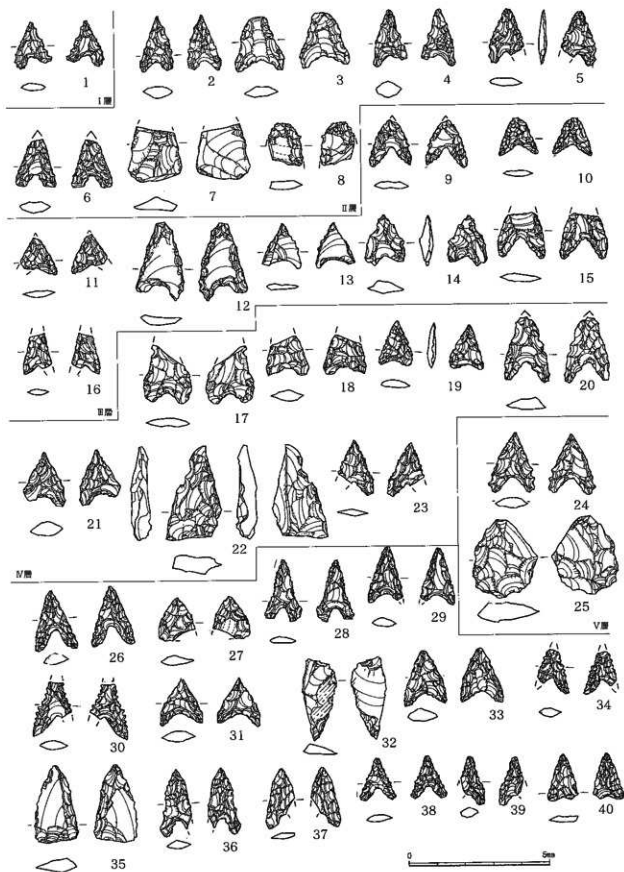
押印番号	遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材
23-1	B-6.133.III層	剥片	6.15	3	2.95	32.27	姫島産黒曜石
23-2	B-5.87.III層	剥片	4.75	2.7	1.7	16.47	姫島産黒曜石
23-3	B-5.12.III層	剥片	3.4	2.7	0.95	6.65	姫島産黒曜石
23-4	C-5.115.IIIa層	剥片	4.8	3	1.1	8.66	姫島産黒曜石
23-5	A-5.18.III層	石核	4.3	4.5	2.9	32.84	姫島産黒曜石
26-1	B-5.75.IV層	石鏢	1.6	1.2	0.3	0.37	姫島産黒曜石
26-2	D-5.222.IV層	石鏢	1.35	2	0.4	0.66	姫島産黒曜石
26-3	D-5.292.IV層	石鏢	1.9	1.5	0.5	0.72	姫島産黒曜石
26-4	B-6.126.IV層	石鏢	1.9	1.3	0.25	0.35	サヌカイト
26-5	C-5.198.IV層	石鏢	2.25	1.6	0.45	1.01	姫島産黒曜石
26-6	B-5.62.IV層	石鏢	2	1.7	0.3	0.83	姫島産黒曜石
26-7	B-5.76.IV層	石鏢未成品	3.3	2	0.7	3.17	姫島産黒曜石
26-8	B-6.36.IV層	石鏢未成品	2.7	2.35	0.75	3.23	姫島産黒曜石
26-9	B-5.107.IV層	チップ	0.9	1.15	0.2	0.13	姫島産黒曜石
27-1	A-6.10.IVb層	石核	3.5	5.3	2.2	21.93	姫島産黒曜石
27-2	B-6.30.IV層	剥片	2.7	4.4	0.5	4.82	サヌカイト
27-3	B-5.112.IV層	剥片	3	2.4	0.8	3.8	姫島産黒曜石
27-4	B-5.105.IV層	剥片	3.4	2.8	1.15	8.66	姫島産黒曜石
27-5	B-6.27.IV層	石核	4.8	4.3	2.5	30.51	姫島産黒曜石
29-1	B-6.87.V層	石核	2.15	1.65	0.35	0.79	姫島産黒曜石
29-2	B-6.69.V層	石鏢未成品	2.85	2.3	0.7	4.13	姫島産黒曜石
29-3	B-6.58.V層	スクレーパー	5.3	4.5	1.4	8.49	姫島産黒曜石
29-4	B-5.80.V層	石核	3.2	7.2	3.5	1590	姫島産黒曜石
29-5	B-6.85.V層	石核	2.3	4.2	2.8	5.85	姫島産黒曜石
29-6	C-5.309.VI層	スクレーパー?	5	2.4	0.9	8.05	サヌカイト
29-7	B-6.57.VI層	エンドスクレーパー	3.6	3	0.5	4.92	姫島産黒曜石
29-8	C-5.301.VI層	クサビ形石器	3.9	2.75	1.5	16.39	姫島産黒曜石
30-1	T-4.	石鏢未成品	2.1	1.95	0.3	1.22	姫島産黒曜石
30-2	T-4.	石鏢未成品	3.25	2.5	0.7	6.75	姫島産黒曜石
30-3	T-6	石鏢	1.6	1.25	0.25	0.32	姫島産黒曜石
30-4	T-6	石鏢	1.65	1.4	0.3	0.38	姫島産黒曜石
30-5	T-6	石鏢	1.1	1.35	0.3	0.22	姫島産黒曜石
30-6	T-6	石鏢	1.5	1.25	0.2	0.24	姫島産黒曜石
30-7	T-6	石鏢	1.7	0.9	0.3	0.27	姫島産黒曜石
30-8	T-6	石鏢	1.65	0.9	0.3	0.29	姫島産黒曜石
30-9	T-7	石鏢	2.35	1.2	0.3	0.58	姫島産黒曜石
30-10	T-7	石鏢	1.65	1.1	0.22	0.32	姫島産黒曜石
30-11	T-7	石鏢	2.1	0.9	0.2	0.37	姫島産黒曜石
30-12	T-7	石鏢	1.95	1.5	0.3	0.56	姫島産黒曜石

押図番号	遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材
30-13	T-7	石鏡	0.85	0.52	0.17	0.08	姫島産黒曜石
30-14	T-7	石鏡	1.45	1.8	0.4	0.74	姫島産黒曜石
30-15	T-7	石鏡	2.25	0.9	0.3	0.58	姫島産黒曜石
31-1	T-8	石鏡	1.55	1.3	0.35	0.51	姫島産黒曜石
31-2	T-9	石鏡	2.1	1.5	0.4	0.6	姫島産黒曜石
31-3	T-9	石鏡	2.4	1.3	0.35	0.41	姫島産黒曜石
31-4	T-9	石鏡	1.55	1.15	0.3	0.33	姫島産黒曜石
31-5	T-9	石鏡	2.15	1.3	0.22	0.47	サヌカイト
31-6	T-9	石鏡	1.95	1.5	0.45	0.83	姫島産黒曜石
31-7	T-9	石鏡	2	1.2	0.3	0.53	姫島産黒曜石
31-8	T-9	石鏡				0.55	姫島産黒曜石
31-9	T-8	石鏡	2.7	1.45	0.5	1.69	サヌカイト
31-10	T-9	石鏡未成品	2.25	2	0.7	3.19	姫島産黒曜石
31-11	T-9	石鏡	2.9	1.2	0.35	1.17	姫島産黒曜石
31-12	T-9	石鏡	4.3	2.35	0.9	4.04	姫島産黒曜石

表2 岩ノ下遺跡 縄文時代遺物観察表

標記番号	遺構/層	器種	時期	器面調整						口径	底径	部位
				口縁部内面	口縁部外面	胴部内面	胴部外面	底部内面	底部外面			
11-12	D-5.175.Ⅰ層	鉢	縄文時代			ナテ						胴部破片
11-13	D-5.77.Ⅰ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	弱み目文線有り	ヨコナテ	ヨコナテ					口縁部破片
11-14	D-5.154.Ⅰ層	鉢	縄文時代									底部
11-15	D-5.115.Ⅰ層	鉢	縄文時代						ナテ		8	底部
11-16	D-5.31.Ⅰ層	鉢	縄文時代	弱ナテヨコ指ナテ	弱ナテナテ後部粗縄文							口縁部破片
11-17	C-6.164.Ⅰ層	鉢	縄文時代			ヨコナテ後ヨコ指ナテ		ヨコナテヨコ指ナテ				胴部破片
11-18	C-6.183.Ⅰ層	-	縄文時代									
11-19	D-5.172.Ⅰ層	鉢	縄文時代			ナテ		ナテ後部粗縄文有り				胴部破片
11-20	D-6.9.Ⅰ層	鉢	縄文時代			ナテ		ナテ後部粗縄文有り				胴部破片
11-21	D-5.161.Ⅰ層	鉢	縄文時代			ヨコ方向糸縄文		ヨコ方向糸縄文				胴部破片
12-1	C-5.224.表土層Ⅰ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ押点文有り							口縁部破片
12-2	C-5.133.表土層Ⅰ層	鉢	縄文時代			ヨコ方向糸縄文		弱ナテ後部粗縄文有り				胴部破片
12-3	C-6.220.表土層Ⅰ層	鉢	縄文時代			ナテ		ヨコ指ナテ三角文線有り				胴部破片
12-4	C-5.18.表土層Ⅰ層	鉢	縄文時代									胴部破片
12-5	B-5.C5.T8表土層Ⅰ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ				ナテ	(24.0)		口縁、胴部、底部
16-1	C-6.158.Ⅱ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ	ナテ		ナテ後部粗縄文				
16-2	C-5.150.Ⅱ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ	指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文		指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文				口縁部破片
16-3	C-5.21.Ⅱ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ	指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文		指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文				口縁部破片
16-4	B-5.92.Ⅱ層	鉢	縄文時代									胴部破片
16-5	D-5.197.Ⅱ層	鉢	縄文時代						不定方向粗き			
16-6	B-6.103.Ⅱ層	鉢	縄文時代									胴部破片
16-7	B-6.103.Ⅱ層	鉢	縄文時代									胴部破片
16-8	B-5.46.Ⅱ層	鉢	縄文時代			糸痕黒褐色						胴部破片
20-1	C-3.7.Ⅲ層	鉢	縄文時代	ヨコナテ	ヨコ指ナテ	ヨコナテ、ナテ		ヨコナテ、ナテ				口縁部破片
20-2	C-5.7.3-Ⅲb層	鉢	縄文時代			指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文		指ナテ後ヨコ不定方向糸縄文				胴部破片
20-3	D-5.180.3-Ⅲa層	鉢	縄文時代			ナテ		ヨコ指ナテ粗縄文有り				胴部破片
20-4	D-5.286.Ⅲ層	鉢	縄文時代			不定方向糸縄文		ナテ後部粗縄文				胴部破片
20-5	D-5.205.Ⅲ層	鉢	縄文時代			ナテ		ナテ後部粗縄文有り				胴部破片
20-6	C-5.93.3-Ⅲa層	鉢	縄文時代									胴部破片
20-7	B-5.120.Ⅲ層	鉢	縄文時代			ヨコ方向糸縄文		斜め方向糸縄文				胴部破片
20-8	C-3.11.Ⅲ層	鉢	縄文時代						ナテ			底部破片
20-9	C-3.2.Ⅳ層	鉢	縄文時代	ヨコ指ナテ	ヨコ指ナテ	ヨコ方向糸縄文		ヨコ方向糸縄文ナテ				口縁部破片
20-10	C-3.1.Ⅳ層	鉢	縄文時代			ヨコ方向糸縄文		ヨコ方向糸縄文後ナテ				胴部破片
25-1	B-5.77.Ⅳ層	鉢	縄文時代	指ナテ	指ナテ	ナテ		文様、ヨコ方向粗き				口縁、胴部上部
25-2	C-3.10.Ⅳ層	鉢	縄文時代									胴部破片
25-3	B-5.175.Ⅳ層	鉢	縄文時代									胴部破片
25-4	B-6.9.Ⅳ層	鉢	縄文時代									胴部破片
25-5	B-5.109.Ⅳ層	鉢	縄文時代			ヨコ方向糸縄文		ナテ、ヨコ指ナテ、三角文様				胴部破片
25-6	B-5.110.Ⅳ層	鉢	縄文時代									胴部破片

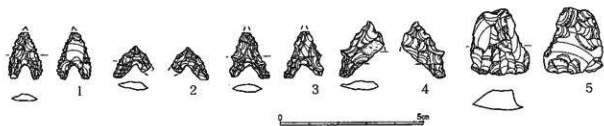
押印番号	遺構/層	器種	時期	器面調査						口径	底径	母位
				口縁部内面	口縁部外面	胴部内面	胴部外面	底面内面	底面外面			
25-7	B-5.135.V層	鉢	縄文時代			ヨコナテ 糸織文	ナテ、ヨコ ナテ					口縁部破片
28-1	B-6.63.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
28-2	B-6.63.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
28-3	C-5.276.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
28-4	C-5.273.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
28-5	C-5.287.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
28-6	C-5.285.V層	鉢	縄文時代									胴部破片
32-1	T-9	鉢	縄文時代			ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ器身 織文ナテ					器底、胴部破片
32-2	T-7	鉢	縄文時代			ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ヨコナテ 織文、ヨコナテ ナテ					器底、胴部破片
32-3	T-7	鉢	縄文時代			ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ヨコナテ 織文、ヨコナテ ナテ					器底、胴部破片
32-4	T-9	鉢	縄文時代			ナテ	ナテ後期糸織文					胴部破片
32-5	T-6	鉢	縄文時代			ナテ	ナテ後期リ文様					口縁部破片
32-6	C-5.47.II層	鉢	縄文時代			指ナテヨコナテ 糸織文	指ナテ器底 指ナテヨコナテ 糸織文					胴部破片
32-7	C-5.192.III層	鉢	縄文時代			指ナテヨコナテ 糸織文	指ナテ器底 指ナテヨコナテ 糸織文					胴部破片
32-8	T-6	鉢	縄文時代			ナセ	ナテ後期リ文様					胴部破片
32-9	T-8	鉢	縄文時代			ナセ	ナテ後期リ 文様					胴部破片
32-10	岩下一括	鉢	縄文時代							ナテ		底面ヨコナテ



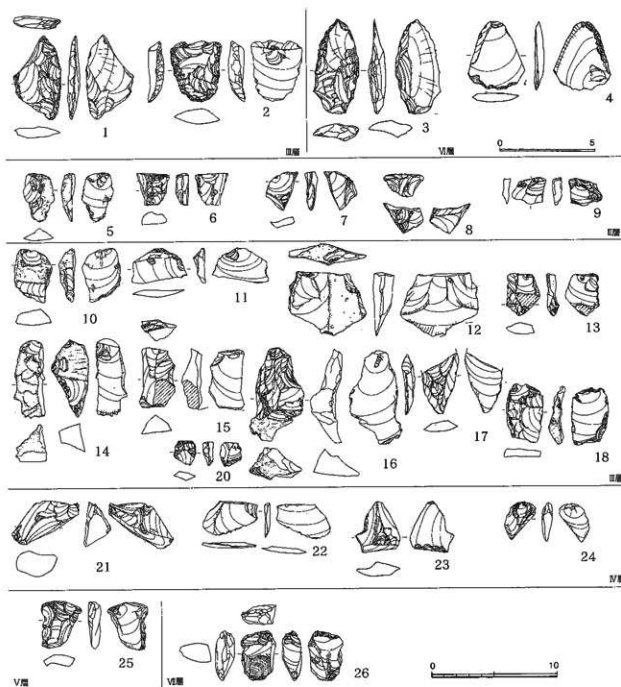
第33圖 各層位出土石鏃(1)



第 34 图 各層位出土の石核



第35圖 各層出土石鏃(2)



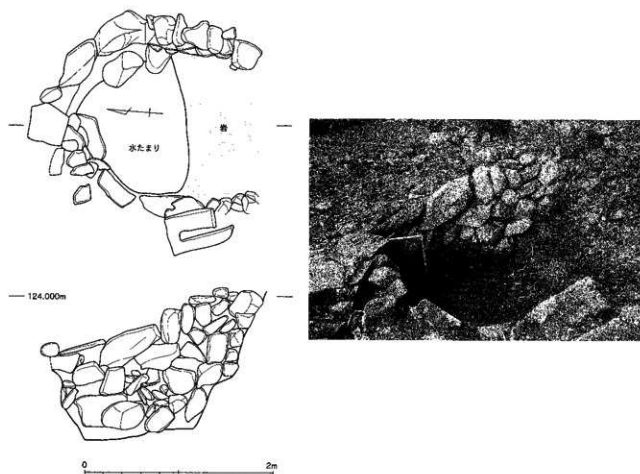
第36圖 各層出土石器類

第6節 太刀洗いの井戸

「太刀洗いの井戸」と呼ばれる井戸がある。この井戸は県道地蔵峠小田原線工事で破壊されるまで清末家の裏で井戸として使われていた（第3図）。平成17年5月からの岩ノ下岩陰の調査時に実測した。

住宅地と一段高い岩陰の間には低い石垣を構築しており、井戸は石垣に接するように構築されていた。深さは約50cm前後、長軸210cm、短軸80cmであった。井戸の南壁面は岩陰から延びる基盤岩壁をそのまま利用し、他は30cm前後の角礫を積んでいた。底は粘土のようなものであるが、水もやはりはっきりしなかった。

調査に参加した地元の人の証言では「侍（武上）が戦から帰ってきて、太刀を洗った井戸である」という。この辺りは大友一族である吉弘氏が屋山長安寺の執行として室町・戦国時代に支配していたところである。丁度、岩ノ下岩陰の南側丘陵上に長安寺が位置し、更にもその東に屋山城が位置する関係にある。そのためもあって豊薩戦・大友改易後と考えられる戦に関連した、落ち武者、落ち姫伝説がところどころにある。「太刀洗いの井戸」も、そうした伝説上の井戸であろう。落ち武者が「吉弘統幸」であったかどうかは知る由もない。



第37図 太刀洗いの井戸

第5章 まとめ

第1節 縄文時代の岩ノ下岩陰

岩ノ下岩陰遺跡の発掘調査の結果、縄文時代の遺物が検出されたが、前章で記したとおり層位的に良好ではなかった。その理由として断面図に記した通り雨落ちラインの外側を中心として多量の落石によって各層がズタズタに攪乱されたことに原因の一端があろう。そのような状況ではあるが縄文時代の土器について細かくみると、早期の無文土器・押型土器が6・7層から出土し、1層から4層までは前期の森4～5式土器、野口・阿多式土器(プロト曾畑)・曾畑式土器・羽島下層式土器、後期では辛川1式土器、晩期の土器が出土している。出土量は縄文時代の遺物が数百点出土しているに過ぎず、加工のある石器や比較的大きい剥片は図示したものが全てである。水洗抽出では長・幅が数mm前後のチップが数千点抽出されているが、比較できる数字ではない。

長い期間、断続的にせよこの岩陰を利用した背景には川沿いの岩陰上に露出した奇岩が一種のランドマークとして認識されたことにある。当然その認識の背景には、自然に形成された不動の屋根・住居ということで利用基準に適合したからに他ならない。しかし利用基準に適合したからといってその基準が長期滞在を許容するものでなかったことは下記の石器組成から窺える。その最大の理由として、岩ノ下岩陰遺跡の岩陰は北面し、庇の規模がやや小さいことがあろう。また岩の割目から水が染み出しており、乾燥した状況ではなかった。

岩ノ下岩陰の石器類で注意されるのは水洗抽出による数千点のチップやほとんどが長さ5cmを超えない小型剥片の存在から考えられるのは、長期滞在による剥片剥離から各種石器製作を主体的に行った状況は窺えない。むしろ短期滞に伴う石鏃等の小型石器を主に製作したことが窺える。また各時期を通じて共通していたと思われるのは、調理・加工具に相当する石器が含まれていないことである。具体的には堅果類等の食材を叩いたり擠ったりする敲石・磨石と、その作業台である石皿である。こうした石器類は長期の使用を通じて打痕・摩滅痕が生じるのであって、少し使ってできるものではない。石器の量から考えると石鏃が最も安定して含まれている。このことから岩ノ下岩陰遺跡は狩猟に伴う短期のキャンプという性格が考えられる。おそらく短期の狩猟小屋に滞在するなかで石鏃等の小型石器の補充に伴う石器製作が行われたのが実態であろう。(補頁)

第2節 中近世の岩ノ下岩陰

中世に遡るものは瓦器、土師器小皿、坏、瓦質火鉢、釜である。これらは、瓦質火鉢を除いて13世紀代に位置づけることができ、鎌倉時代に岩陰が何らかの形で利用されていたことが想定できる。長岩屋の谷には六郷山の一つである天念寺があり、中世は「長岩屋」と称し谷全体を領域として各所に「坊」を有していた。『六郷山年代記』によれば、建保6(1218)年に堂舎の落慶供養が行われており、13世紀は「長岩屋」が寺院としての姿を整えた時期にあたる。これは、外寇を起因とする六郷山に対する幕府の梃子入れと歩調を合わせるものであり、13世紀代には盛んに異国調の折櫓が各寺院で行われた。「長岩屋」でも行われており、岩ノ下岩陰で認められた13世紀代の遺物も、そのあたりの状況を示すものであるかもしれない。

なお、第10図20の瓦質土器火鉢は15世紀後半から16世紀前半代のものである。

近世の遺物は、18世紀を中心とする陶磁器と、第9図1から6と第10図2から19に示す土師質の雑器類である。土師器の雑器はすべて宇佐市上高で焼かれた「ホーロク焼」(高村焼)である。「こね鉢」は、胴部が丸く張り、口縁部が小さく折れるなど17世紀後半から18世紀前半に納まるものである可能性が高い。共存する「焙烙」は把手付きのものであり、18世紀後半以降にはおそらく民俗資料と共通する口縁部に小さな構みが二箇所付くタイプに変化すると考えられることを加味すると、岩ノ下遺跡出土の高村焼の多くが、18世紀前半代までに納まると考えられる。なお、岩ノ下遺跡からは、還元焰焼成のものは出土しておらず、17世紀代でも前半には遡らない。(小柳)

付篇1 岩鼻岩陰遺跡

1調査の概要

岩ノ下岩陰の東方で長岩屋川の上流にあたる豊後高田市大字長岩屋字地主に通称「岩鼻」と呼ばれるところがある。地名どおりに岩が南に突出した部分の南側面に岩陰がある。雨だれ線から川までの距離は13mであり、小規模な河岸段丘である。こども県道地蔵峠小田原線の道路改良工事が予定されており、平成19年7月に試掘、同年10月に確認調査を行った。岩陰は南北に39m幅に渡って展開し、奥行きは最大で3mである。調査では開口に直交する1トレンチ、2トレンチと前庭部に平行する3トレンチを設定した。

層位

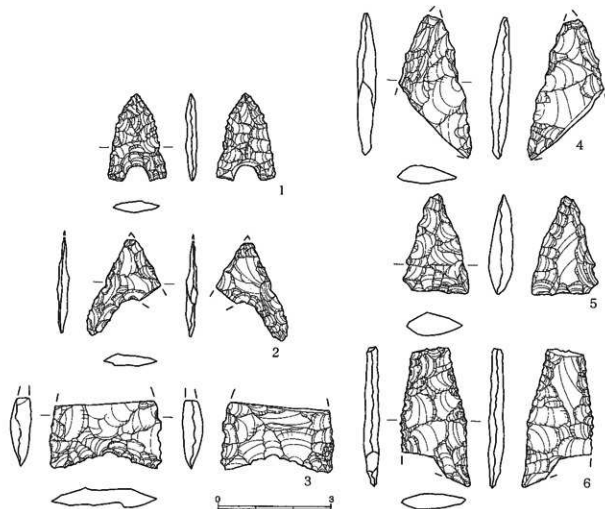
現在まで遺物は少なくとも三つの層に区分される。

第1層では中世の祭祀土坑や礎石状の石列が検出された。この石列付近には炭の層が薄く堆積し、除去すると土坑があり、内部から中世期の瓦器碗、土師器を埋納していた。

第2層は深さ10cmから25cmまでの間の黒色土層である。弥生時代前期・縄文時代後・晩期を主体とする包含層で土器・石器・獣骨・人の歯が出ている。

第3層は深さ25cmから100cmまでの黒色土層である。上部が縄文時代中期期、下部が縄文時代前期を主体とする包含層でやはり土器・石器・が出ている。獣骨も僅かに出ている。

付篇2で西本豊弘氏が報告する獣骨はほぼ2層からの出土で、縄文時代後期・晩期と推定する。



第38図 岩鼻岩陰から出土した石器 ※石材は姫島産燧石

付篇2 大分県岩鼻岩陰遺跡の動物遺体

西本 豊弘

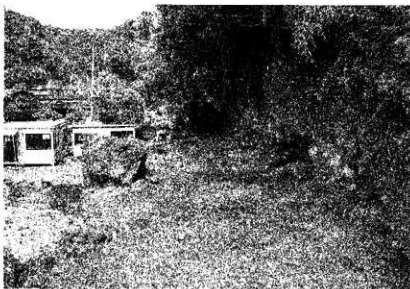
岩鼻岩陰遺跡の2007年度の調査で動物遺体が少量出土した。大部分は小さな破片であり、部位と種名の同定ができないものが多かった。その内容は表に示したとおりであり、シカとイノシシのみ同定できた。出土破片数は143点であり、そのうち65点は焼けた骨であった。シカとイノシシともに頭部と四肢骨など、ほぼ全身の骨が含まれる。年齢も、歯や四肢骨端の化石化の状態から見て成獣だけではなく若い個体も含まれていた。

表1 岩鼻岩陰遺跡出土の動物遺体一覧

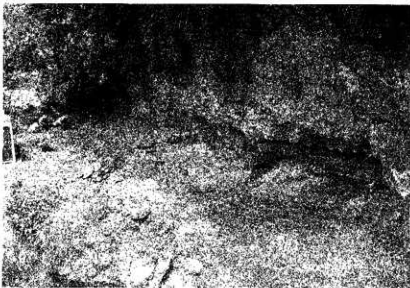
出土地点	層	日付	種名	部位名	左右	現存部分	備考	個数
トレンチ1	2層～6cm	070703	シカ/イノシシ	四肢骨片				2
トレンチ1	2層～6cm	070703	シカ/イノシシ	肋骨片				1
トレンチ1	2層～6cm	070703	シカ	上顎第3後臼歯	L		前部咬痕のみ摩滅 現在の九州のシカと 同大 新しい時代のもので ある可能性	1
トレンチ1	2層～6cm	070703	イノシシ	下顎第2切歯	R		摩滅ほとんどなし 1.5歳くらい	1
トレンチ1	2層～6cm	070703	シカ/イノシシ	歯片				2
トレンチ1	2層～6cm	070703	シカ/イノシシ	四肢骨片				4
トレンチ1	2層～25cm		イノシシ	臼歯片			未崩出	1
トレンチ1	2層～25cm		小型獣	四肢骨片				2
トレンチ1	2層～25cm		陸獣	頰窩骨片				1
トレンチ1	2層～25cm		陸獣	四肢骨片				1
トレンチ1	2層～25cm		陸獣	破片				2
トレンチ1	2層～25cm		不明	破片				1
トレンチ1	2層～25cm		イノシシ	肋骨	L	遠位部片		1
トレンチ1	2層～25cm	070703	イノシシ	距骨	R	前部少し欠く		1
トレンチ1	2層～25cm		シカ/イノシシ	破片				1
トレンチ1	2層～25cm	070703	シカ/イノシシ	破片				1
トレンチ1	～25cm～35cm		シカ	踵骨	R	完存(骨端未磨)	垂成獣	1
トレンチ1	～25cm～35cm		イノシシ	下顎第1切歯	L			1
トレンチ1	～25cm～35cm		シカ	肋骨	R	近位端_骨幹部		1
トレンチ1	～25cm～35cm		シカ	肋骨				2
トレンチ1	～25cm～35cm		シカ/イノシシ	破片				16
トレンチ1	～25cm～45cm		シカ/イノシシ	四肢骨片				1
トレンチ1	焼土下層		小型獣?	四肢骨片				1
トレンチ1 溝辺一近	シカ		シカ	口蓋骨片・上顎骨片				1
トレンチ1 海側	～30cm		シカ/イノシシ	四肢骨片				1
トレンチ2	1層黒色土	070703	シカ	距骨	L	完存		1
トレンチ2	1層黒色土	070703	シカ	踵骨	R	前部_関節面		1
トレンチ2	1層黒色土	070703	シカ	肩甲骨	R	白_骨幹部		1
トレンチ2	1層黒色土	070703	イノシシ	下顎第2切歯	R			1
トレンチ2	1層黒色土	070703	シカ/イノシシ	破片				12
トレンチ2		070704	不明	破片			焼骨	1
トレンチ2 奥部	表土下黒色土層		シカ/イノシシ	破片				1
トレンチ2 奥部		070705	不明	破片			焼骨	1
トレンチ2 奥部		070705	不明	破片			内53個は焼骨	66
トレンチ2 奥土			不明	破片			焼骨	10



岩ノ下岩陰調査前風景 2005.5.13

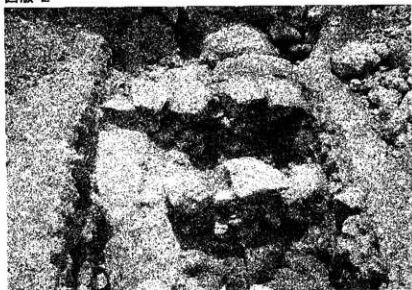


岩ノ下岩陰調査前風景 2005.12.19

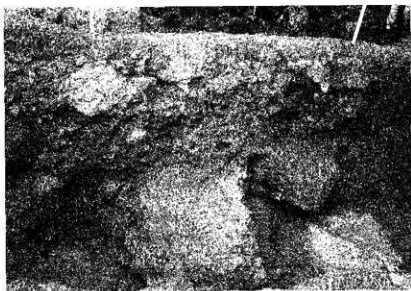


岩ノ下岩陰調査前風景 2005.5.19. No.3

图版 2



岩ノ下岩陰.T3(A4)区付近北方向



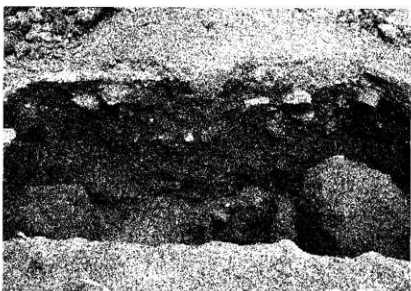
岩ノ下.T2 東壁



岩ノ下.T8. 東壁断面



岩ノ下岩陰.7トレンチの東壁



岩ノ下岩陰.2トレンチ(C3)区.西壁



岩ノ下.2トレンチ両壁

図版 4



中世の土師器が集中して出土。
人骨も出土している。

岩ノ下.T6.Ⅰ層



人骨と土師器の出土状態

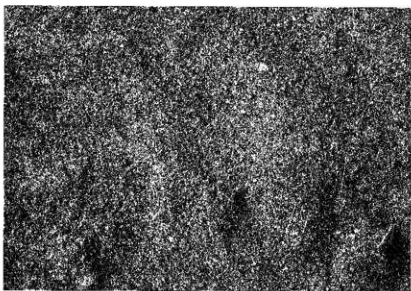
岩ノ下.T6.Ⅰ層



岩ノ下.T6 奥部.Ⅲ層の遺物出土状況



岩ノ下.T8.Ⅲ層遺物出土状況



岩ノ下.T6奥部.Ⅲ層遺物出土状況



岩ノ下岩陰 T7.Ⅲ層遺物出土状況

図版 6



岩ノ下 .T8.VI層相当 .出土状況 (1)

縄文時代早期
押型文土器・無文土器が出土している。

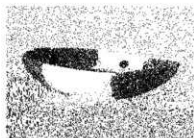


岩ノ下 .T8.VI層相当 .出土状況 (2)

縄文時代早期の押型文土器・無文土器が出土している。
写真の両側は岩が出ている。

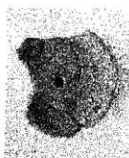


岩ノ下岩陰 T6 岩陰内奥部出土の土器器



2

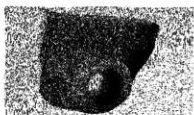
土師器類



11-2 土師器



土師器



10-6



10-5



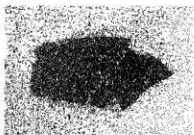
10-2



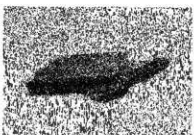
5

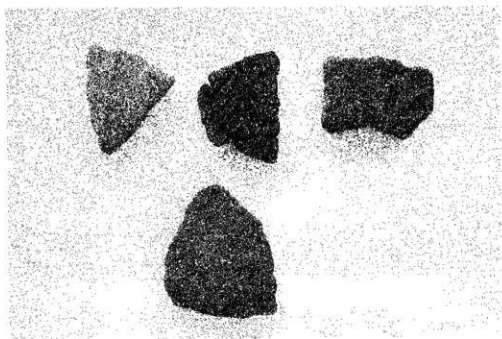


10-16

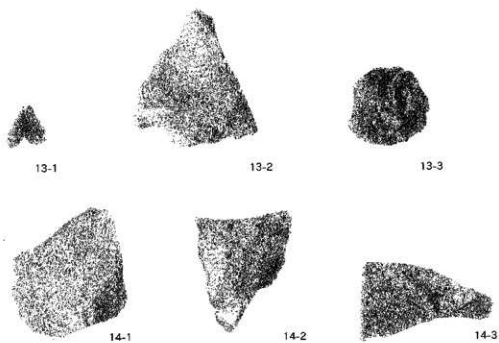


高村筑

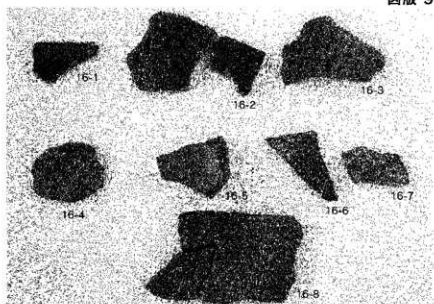




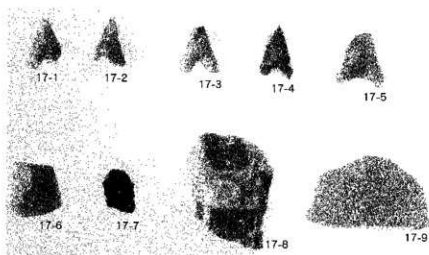
表土・I層 縄文土器類



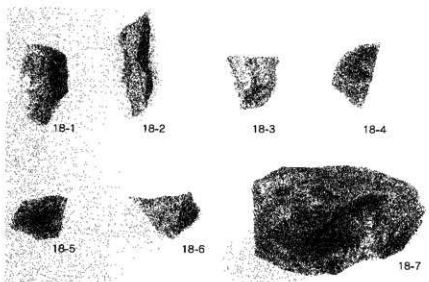
表土・I層出土の石器類



第II層の土器類

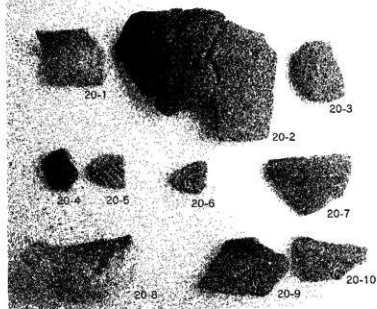


第II層の石器類

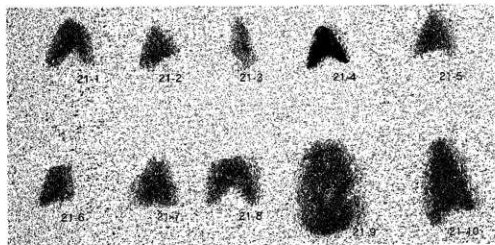


第II層の石器類

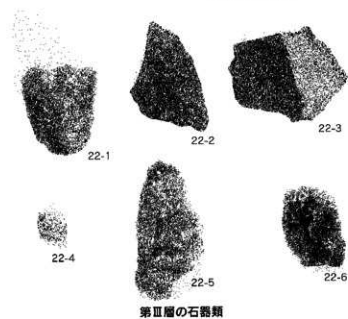
図版 10



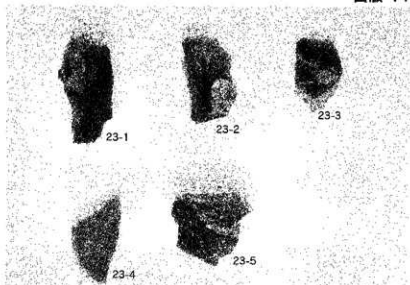
第Ⅲ層の土器類



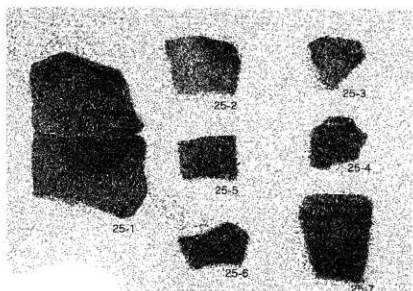
第Ⅲ層の石器類



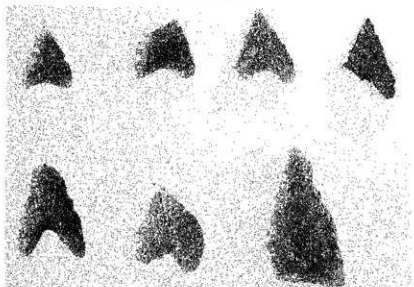
第Ⅲ層の石器類



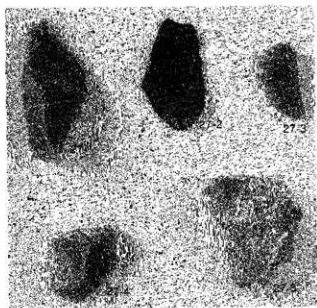
第Ⅲ層の石器類



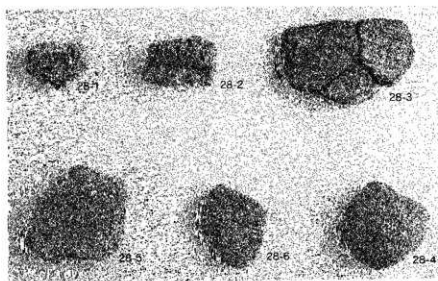
第Ⅳ層の土器類



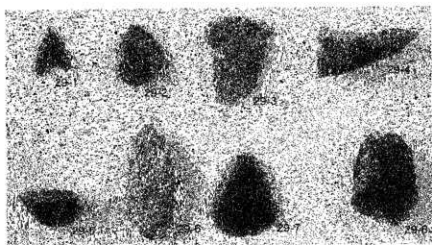
Ⅳ層出土の石器類



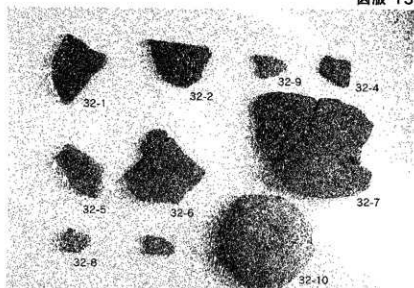
IV層出土の石器類



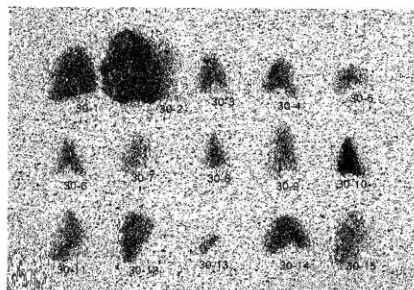
V・VI層出土の石器類



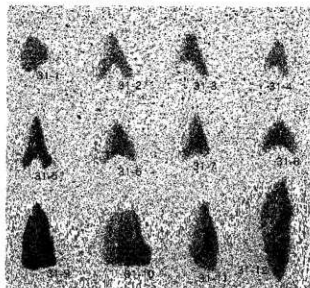
V～VII層出土の石器類



Ⅱ・Ⅲ層出土の土器類 (追加)



水洗抽出資料(1)



水洗抽出資料(2)

報告書抄録

ふりがな	いわのしたいわかれいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	岩ノ下岩陰遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編集者名	綿貫俊一、小柳和宏							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	大分市中判田ビワノ門1977							
発行年月日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩ノ下岩陰遺跡	大分県豊後高田市大字長岩屋字岩ノ下	209	102192	33° 34' 43.24949"	130° 02' 42.80811"	大分県教育庁埋蔵文化財センター	160m ²	県道地蔵峠小田原線工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
岩ノ下岩陰遺跡	岩陰	縄文時代 早期・後期 中世		包含層	土台・石器 人骨・土師器			

岩ノ下岩陰遺跡

—県道地藏峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大分県教育庁埋蔵文化財センター文化財調査報告書第32輯

編 集 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中野田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675
発 行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中野田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

印刷 極東印刷紙工株式会社
